

土 淨

昭和十一年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一月發行）
昭和十一年五月廿日印刷納本 昭和十二年六月一日發行

第二卷 第六號



六
月
號

法然上人法語抄

藤井 實應 編

菊半裁版 一四四頁

クロース装函入

定價 卅四錢

送料共

信仰の珠玉！ 浩翰なる上人遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句！
現代日本人の聖典！

手頃なポケット型、装訂も確りしたものですから、仕事の合間、電車、自動車の中で手軽に取出して讀める。心靜かなる時、悩める時、隨時隨所に讀めて心の糧となり生活の指針となる。

敬虔な編者が一字一拜の誠を捧げ、嚴密な校訂を経てなつたもの。配列にも、編輯にも新機軸を開き、活字も九ポイント總ふり假名付であるから誰にも讀める！

勤め人も商人も労働者も、そのポケットに懷中に必ず一本を蓄へて信仰の眞髓に接して正しい生活の確立に資して下さい。

!! 新刊發賣 !!

◇ 法然上人鑽仰會 發行所 ◇

改增
訂
版補

信仰讀本

錢二十二 定價 頁〇八版六四 著 康 辨 村 中

邪教の迷夢より醒めよ！ 信仰を
正しい軌道の上に！

邪教が跋扈するのは民衆生活の深刻化を物語るものであるが、同時にそれは正しい信仰の光が遮られてゐることを示してゐる。凡ての迷蒙から己れを解放し、生活を確立するためには己れの信仰を正しい軌道の上にのせなければならぬ。
今回法然上人續仰會は信仰を求めて、しかも良師を得ざる人々のために、この名著の増補改訂版を出版し、正しく、力強い信仰への扉を開く。『淨土』誌上の著者の名講義の愛讀者は是非一讀せねばならない名篇である。

内 容

- 第一章 悟りと救ひ
- 第二章 宗教と人間の望み
- 第三章 信仰する心持
- 第四章 信仰の本尊
- 第五章 信仰を得る迄

法然上人

大正大学教授 大野法道著 四六判 定價 共拾七錢
法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するが、して、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その端々たる餘韻は讀者を法悦の彼方にひき込まずにはおかぬ。

◆ 會 仰 鑽 人 上 然 法 所 行 發 ◆



大正十三年

◇ 淨 土 第二卷 第六號 六月號 目次 ◇

- ・ 表 紙 安藤不二夫
- ・ 目次カッタ 青柳喜兵衛
- ・ 扉 鈴木金平

感心した人物を語る

青年德田利恭の大往生 陸軍教官 大村桂藏 (二)

沈黙の力 光明寺貫主 窪川旭丈 (二三)

災難は世の常 増上寺法主 大島徹水 (二五)

随想 芝園雑話 眞野正順 (七)

續念佛偶記 佐藤春夫 (一〇)

信仰相談 (五二)

高僧を語る 袋中上人 筑土鈴寛 (四三)

信人念 夫に盡す二十年の苦節 永井鳳泉 (六〇)



講大
話衆

お念佛に生かされて

梅原眞隆

(四八)

欄庭家

心得ておくべき按摩のこづ
明るい街の佛心

田中法善

(五六)

家庭ノート

編輯部

(一二)

小説

奇

蹟

十一谷義三郎

(二六)

◇逸話名僧傳

(三七)

◇歌

壇

與謝野品子選

(五九)

こ・ど・も・の・じ・や・う・ど

ちひ
◎小さい弟と目高の話
おとうと
めだか
はなし

福田正夫

(三八)

つぎ
◎連続漫画
まんぐわ

はねとひがんちゃん

野田信

(三八)

講法
義語

あふひ草

中村辨康

(六四)

編輯後記

(七)

偉大なる權兵衛・大谷光瑞氏の偉業

佛教大辭彙評

高島米峰

大谷光瑞氏が西本願寺の法主として大谷伯爵家の當主たりし時代から、今日の放浪時代に至るまでの間、内地に外國に各種の事業を企圖し着手せられたこと、その幾何なるかを知らない。氏は種蒔の天才である。

しかし氏は遂に收穫の器ではない。この偉大なる權兵衛は世界の各所に様々な種を蒔きながら、後から後から島のほじくるに任せて、しかも平然としてこれを袖手傍觀して敢て悔ゆるを知らないだけの雅量の持主である。そこに氏に對する世評の香しきものあり香しからざるものある所以がある。

その中でたゞ一つの異例として蒔かれた種が立派に實を結んだのは『佛教大辭彙』の編纂出版である。事は明治四十四年親鸞上人六百五十回遠忌追修の記念として、明治四十一年西本願寺經營の佛教大學に命じ、全學の教授講師を總動員してこれが編纂に當らしめたといふに始まつて居る。

爾來正に十年間、數十人の委員が懸命の努力を重ね、語數約三萬、圖解約二千、四六倍判約五千頁の彪大なる辭典の完成を見るに至つたのである。大正の御代を経て昭和の今日と雖もまだこれほど大きな、これほど完備した佛教辭典は何處にも出来て居ないのであるが、況んや明治時代に於てよくもこれだけの大事業が完成せられたものだ、と、流石に光瑞氏の腹の太さに敬服もする。

併しまたこの事に限つて例の飽きっぽさを發揮し他人に收養せしめられなかつたことを、不思議とし幸慶とする。蓋しこれは編輯員諸君の熱誠が然らしめたものであらうことを信

ぜざるを得ない。佛教亡びざる限り『佛教大辭彙』の生命は永遠であり、この書の生命の永遠である限り大谷光瑞氏の生命も亦永遠である。

この辭書の長所は二三にして足りない。(一)項目の發音通りに配列して字音假名遣の規則に依らなかつたこと(二)特種の術語その他素人向きのしない言葉には一々假名を付けたこと(三)項目が豊富で佛教の教義、歴史、寺院、典籍、學者、その他、日常慣用の卑近な言葉まで随分汎く蒐集されて居ること(四)説明が丁寧で同一の言葉でも宗派に依つて取扱の違ふのは一々その相違の點を明示してあること(五)精巧なる挿繪を多くして文章の説明を助けて居ること等々、教へ上げれば際限がない。

ところが大正十二年の大震災の時、原稿焼失の厄に遭ひ、爾來久しく世人の渴望に背いて居たのであるが、この度發行書肆富山房に改版縮刷し全六巻として發賣したのは、正に大旱の雲霓を思はしめるものがある。殊に初版に比して形が小さくなり取扱が便利になつたことは一層の喜びである。時恰も佛教復興の機運に際會し、一般の大衆もたゞ聽くだけでは満足が出来ず、少しでも自ら研究して見ようといふところまで來たやうである。さういふ人に取つて誠に申分のない師友として敢て本書を推薦するを躊躇しない。

『付記』 佛教大辭彙全六巻・第一、二、三、四巻既刊・定價各巻七圓五十錢・特價各巻六圓・東京神田富山房發行

淨土

六月號

わが心こころをしづめ

このさはりをのぞきて後あと

念佛ねんぶつせよとにはあらず

たゞつねに念佛ねんぶつして

そのつみを減へすべし

法然上人法語抄一八三





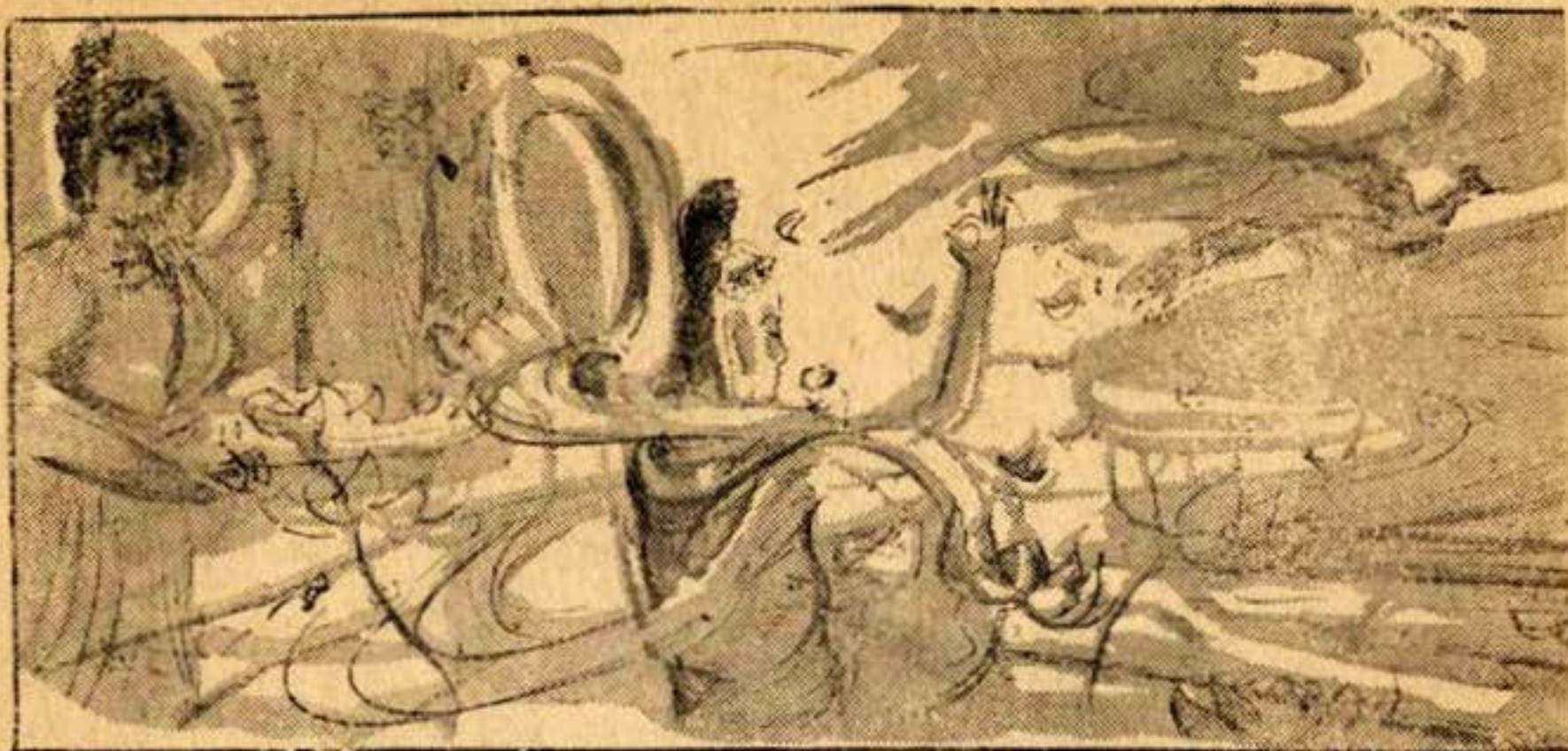
青年德田利恭の大往生

陸軍教官 大村 桂 巖

利恭の家は眞如堂の北側の高臺にあつた。その二階の座敷から右手に眞如堂の境内一帯が一目に見える。大きな本堂と三重の塔が森の上に浮いてゐる。正面の東の方は浄土寺町

が眼下に開いて、向ふの山の麓には鹿ヶ谷の法然院や浄土宗の専門學校が呼ばれば答えるやうだ。其左手は銀閣寺で其上に大文字山が控え其又左手に雲を衝いて高く聳えてゐるのが比叡山で、夜などは座敷に座つてゐて頂上の灯影がち／＼と見える。

彼は毎日眞如堂の前を通り黒谷の境内を抜けて岡崎神社の前に出で白川を渡つて若王寺、永觀堂の前を過ぎては東山中學校へ通學したのであつた。彼は生れて間もなく天にも地にも掛替へのない父の死に會つた。幼い彼は既に此時から癒やすことの出来ない深い痛手を受けてゐた。彼が五



歳の時であつた其の時分彼れの家庭は神戸に住んでゐたが思ひもよらぬ關節炎に罹つて其の治療の爲に母親に連れられて暫く私の家に出養生に來てゐた。其時私は東山中學校長をしてゐた。其が因縁で彼は小學校卒業後この東山中學校に入學したのである。彼れの家庭は淨土宗の檀徒であつた。彼れの祖父と私の父と親友であり、徳田の家

は祖先以來彦根宗安寺の檀家で、此祖父は號を秋水と稱し、書家として立つてゐたが、儒佛の學に通じ、自ら居士を以て任じ、朝夕誦經念佛怠らず、毎日佛書を読むのを樂しみにしてゐた。

彼が東山中學校に入學すると祖父と母とは此子の爲に京都に移り住んだ。唯だ、此徳田の一粒種を立派に育て上げることに家中が熱注してゐた。利恭は純良な性質であつた。脊も高く肉附きもよくすらつとした氣品の高い青年であつた。彼は少し悪い足運ばせて毎日東山の麓を通學しては一心に勉強した。學校は淨土宗立であるので知らず知らず宗教の話の聞いたり宗教的訓練を受けるので、段々と佛様の難有いことや佛法の尊いことを知るやうになつた。亡き父の弔いも丁寧にするやうになつた。朝も早く起きてお祖父さんと一緒に必ず佛壇の前に座つてお念佛を唱へてゐた。眞如堂の鉦の聲、黒谷の木魚の音、學校往復の是等の環境が彼をしてもうしつかりと信仰の中へ引き入れてしまつた。彼は祖父から教へられる御經の説明や法然上人の行狀物語などを、一人きりの母に話して聞かしては、寂しい母親を慰めるやうになつた。

かくしてゐる内に早いもので中學の五年は過ぎた。祖父と母と祖母とは涙と共に彼れの卒業證書を佛壇の前に供へて彼れの亡き父の靈に報告した。

中學卒業後の彼は固疾を持つ身であるのと家計の都合もあつて、直に實業に従事することに決心した。叔母の嫁してゐる先きが福井市の大きな電機商會であるので其所に見習として勤める事になつた。發明な彼は一箇年にして押しも押されもしない立派な店員となつた。其後諸方に出張して商賣の爲に活躍した。東京へも數回やつて來た。其度に私の寺に立寄つた。彼は熱心に商賣の話をした。併し其程度彼は商賣の極意は信仰にあると附け加へた。宗教心の無い人は本當の商賣は出来ない、金儲けに狂奔することが商賣ではない、商賣の面白味は金を儲けることでなく金の生命を活かすことにある、商賣は自分が喜ぶといふことよりは人に喜んで貰ふことが第一である、商賣をして人が喜んで下さるのを見てさうして自分が喜び自分も幸せを受けけるのであると滔々として彼は商賣と宗教との關係を述べ立てる。

彼は息を繼いで言ふ。私が東山中學校に通つてゐる時

に、校長さんが修身の時間に、不求自得といふことを話して聞かされた。不求自得といふのは、自分の日常の幸福利益を自分から第一に求めないのだ。求むる所は他にある。自分等の此人生に於ける目的は佛様が相手だ。西郷南洲の言つた天を相手とするといふのと同じだ。佛様を相手にして商賣するのだ、正真正銘に佛様の御心に叶ふやうに商賣もし取引もするのだ、佛様は寝ても醒めても世の人々の救済を念とし給ふのだ、此御心を我心として商賣する、これが商賣の第一義である、さすれば當然其店は繁昌して來る、店の繁昌自分の利益は第二だ。第二だが自然に店も榮え自分も幸福となる、これが不求自得なのだ。求めずして自ら得るとは此事だぞと校長さんが教へ下ださつた。私は之を私の商法商規として嚴守してゐますと彼は自分の牢として抜くべからざる堅い信仰を語つては夜の更けるのも忘れて自分の祖父のやうに私に話して聞かせた。彼は私の所で泊つた時でも必ず朝夕佛様の前で暫く御念佛を唱へてゐた。實に愛すべく又尊い青年であつた。

× × × × × × × ×

彼は二十五歳の春再び京都に歸つて身を養ふことゝなつ

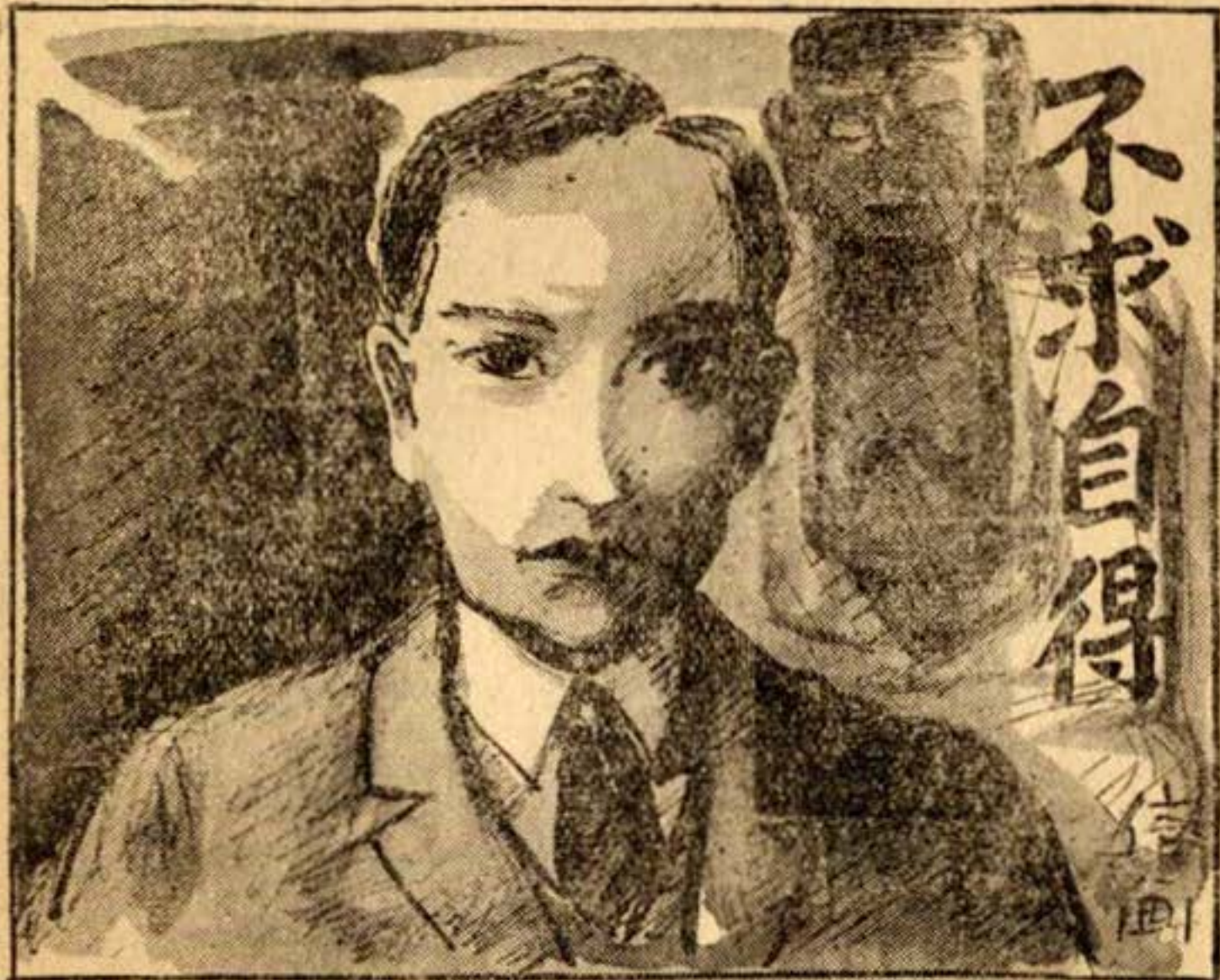
た。彼は餘りに商賈に熱心過ぎた。

彼は半年程前から肋膜炎にかゝつてゐた。醫師の注意により静かな東山の淨地で病を養ふことになつたのである。祖父も母も一所懸命に看護した。

情けの籠つた手厚い親の心は通じたものと見え暫くして彼は散歩が出来来るやうになつた。

彼は淨土宗の信仰を持つてゐたので、多くは淨土宗の寺に詣づることを散歩の目標とし樂しみとした。最も近い黒谷へは殆ど毎日のやうに散歩した。さうして彼は法然上人と黒谷、熊谷蓮生と黒谷などの關係を調べたりなどした。黒谷の山門に淨土眞宗最初門とある勅額などに對する質問を私の所へ手紙で尋ねてよこしたりしたこともあつた。

不求自得



興味を持つてよく紫雲石の側に立つて長らく瞑想に耽つた

りしてゐた。或は鹿ヶ谷の法然院の本堂で一人座つて御念佛申してゐたこともよくあつたとのことである。時には百萬邊や知恩院へまでも参詣した。

さうしては祖父や母に法然上人の御教や其影響などの話をして彼の宗教的知識の廣いことや其信仰の堅固なのに驚かした。併し病氣は又再び重つた。今度はもう立てなくなつた。所が彼はもう安心決定してゐたらしい。少しも愚痴つぽいことや未練がましいことは言はなかつた。

寧ろ悲哀に包まれてゐる母を慰むるに、佛の淨土に生るることの幸せを物語つた。『親に先立つ不孝病身をいつまでも長らへて親に苦

彼は紫雲石の物語に深く

は謝する術もないが、

勞を掛けるのは不孝の罪の上塗りだから自分は佛様の淨土へ行つて、父上と共にお母さんのいらつしやるのを御待ちしてゐる。お母さんはお祖父さんを大事にして達者に暮して下ださい。私は極樂で祈つてゐますから』

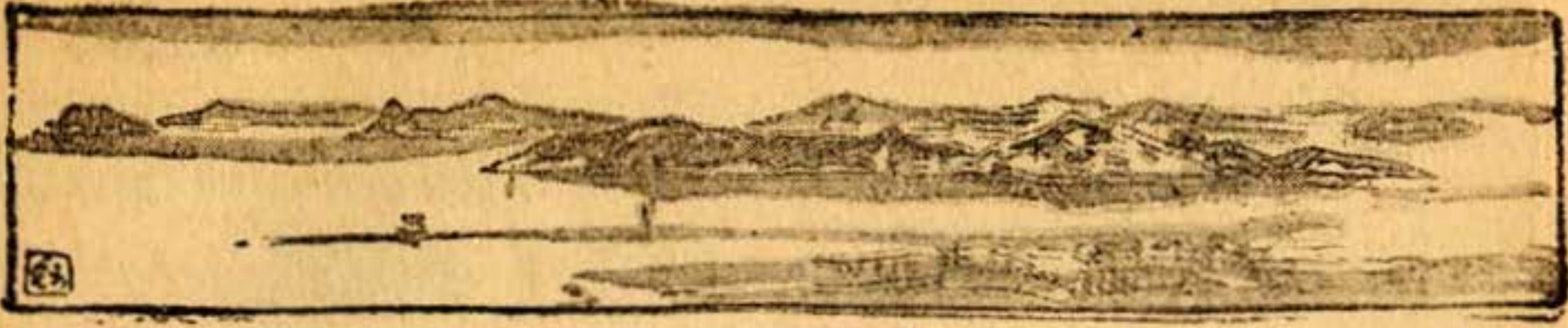
彼は死ぬる三日前に一度澤山の佛様や菩薩の集つておゐでになる所を夢のやうに見た。彼れの母親の話に、利恭がお母さんあれが見えませぬか、澤山難有い佛様方がお集りになつておゐでになる、何所でせうか。お母さん、私は安心して死んで行きますからお母さんも安心して下さいと言つたとのこと、それから三日目昭和六年六月三日の朝、彼は又、お母さん澤山佛様や菩薩様方が来ておゐでになるよ。お母さん見えませぬか、私はもう今日はお迎ひを受けたのです。お祖父さん、叔母さん、お母さん長々お世話になりましたして難有う御座りました。先立つ不孝の罪丈けはどうかお恕るし下ださい。お父さんのお傍へ行つて色々お話をします。さうしてあなた方をお待ちしてゐます。と手を合はしてはつきりと別れの言葉を告げた。母は泣きくづれるのを老いたる父に叱られながら一緒に御念佛を申し續けた。利恭青年は手の珠數を爪繰りながら靜に御念佛を申

し、すや／＼と眠むつたり時々眼を開いてはそこらを眺めたりしてにこ／＼としてゐる。誰れが之を臨終などと思へやう、彼れの顔には少しも苦しみなどは見られぬ、唯だ唯だ悟りきつた若い上人のやうであつた。

其日も暮れて夜の十時、今しも利恭は俄に合掌して、あゝ西の方から澤山佛様がお迎ひに来て下だした、もう吉田山の所まで来ておゐでになる、お母さん、お祖父さん、叔母さん、さようなら、亞米利加の叔母さんにもよろしく、さようなら、と言つてとう／＼彼れ利恭は合掌しながら二十六歳を一期として遂に此世を去つた。併し彼は立派に極樂淨土に往生したのである。

× × ×
彼れの祖父は其後一年して又孫の後を追つた。

母親は今千葉縣茂原町に移り住んでゐる。其時の叔母と當時亞米利加にゐた叔母とは今東京に住んでゐる。紳商小幡信雄氏の令夫人は後者である。眞如堂の森にはそろ／＼杜鵑が鳴き出すだらう。黒谷の紫雲石の邊には春の霞が棚引いてゐるだらう。鹿ヶ谷の法然院の常行念佛の中には利恭の聲も交つてゐるであらう。(完)



芝園雑話

— 其の —

眞野正順

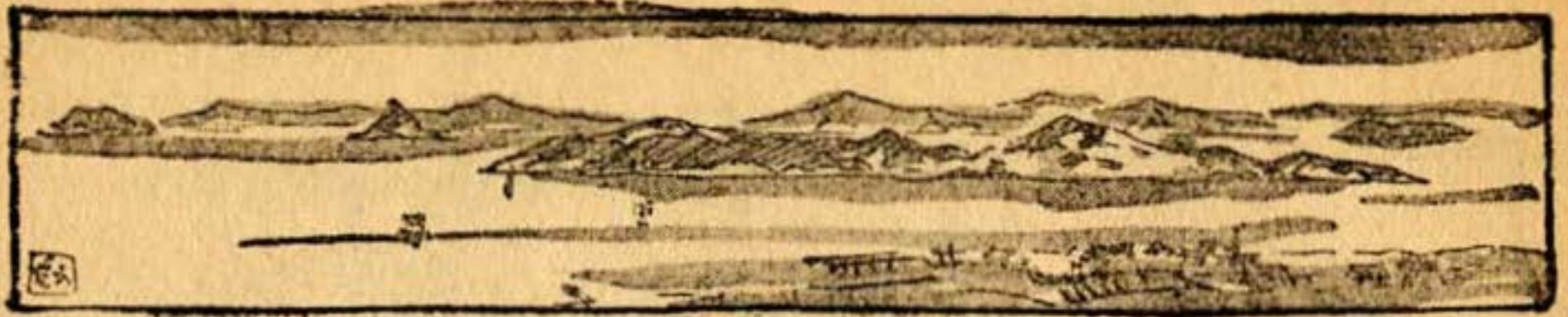
一
こんな話を聞いたことがある。

○
神田お玉が池の道場師範、千葉周作先生が或る年、門人數名を連れて、三河國御油の竹内道場に遊びに行つたことがある。

ちやうど田園の緑も爽かな初夏であつたので、一日、潮干狩をやらうと議が決し、朝から食物などを用意して、山を下つて海岸に出た。のんびりとした麗かな日映の下で、引汐に取残された水溜の小魚などを追つてゐるのは愉快なものである。だん／＼沖の方に出てしまつたが、日は漸く西空に傾き、潮はだん／＼と増して、四邊は暗くなつて來た。

『さあ、歸らう』

一同陸地を指して、さぶ／＼歩きはじめたが、思つたより遠く沖に來てしまつてゐるので、行けども行



けども陸は近くなならない。その内、さし潮はだん／＼増して何時か水は膝から腰の邊にまで及び、あたりは全く暗くなつて、糢糊として陸地の方角さへ見えなくなつた。

『困つたな、これは……』

四邊が暗いので、一同、水の中を足で探りながら、少しでも小高い方へと歩いてゆく。だが、海の底は波の加減で自ら高低が出来てゐるから、淺くなつたと思ふとまた急に深くなり、心細いこと云はん方ない。さうしてゐる内に、全く方角を見失つてしまつた。

すると、門弟の一人が急に氣がついて、背の包の中から、數本の松明を取出した。歸途の小道の爲に用意して來たものだつた。

そこで一齊に松明に火を點じて高く頭上にかざして、暗の中をすかして見たが、見えるものはほんの近間の波ばかり、遠くは矢張黑暗々として全く何物も見えない。進退こゝに遂に谷まつてしまつたわけである。

その時、周作先生は立騒ぐ一同を制して、

『すこし、靜かにせよ』

と云ひながら、眼を瞑り暫くちつと何物かに耳を澄してゐられたが、やがて、

『判つた。陸はこつちだ。儂の後を従いて來い。』

と、眞先に歩み出された。すると果せる哉やがて無事に陸地に歸り着くことが出來た。

○

てんでに濡れしよぼれた袴の水を暗い砂の上に絞り落しながら、門弟達が先生に訊ねた事は、むろん次の疑問であつた。

『先生はどうしてあの暗の中で陸地の方角を知つたのですか』



先生の答は、かうであつた。

『儂は、あの時、ふと太田道灌の古歌を思ひ出した。
遠くなり近く鳴海の濱千鳥』

鳴く音に潮の満干をぞ知る

と云ふのだ。千鳥は波打岸に飛ぶ小鳥だから、潮が干れば遠く、潮が満ちれば近く其聲が聴えるといふ意味だ。だからさつき暗の中で耳を澄して秘かに聴える千鳥の聲を頼りに歸つて來たのだ』

一同は、今更ながら師の周到な心の用意と危難に遭遇して亂れぬ精神の鍛錬に深く心服したのであるがやがて、竹内道場に歸りついて、その事の次第を道場主に話した。

その時黙つて聴いてゐた竹内老人は、やがて口を開いて、かう云つたそうである。

○

『それは、危ない事ぢやつたのう。よう助かつた。お前達は、實は死ぬのぢやつたぞ。

はじめに悪いことは松明を點けて、頭の上で振り廻した事ぢや。それでは、却つて見えるものが見えなくなる。何でも、自分の周圍さへ明るくすれば、それでよく見えると思ふのは間違ぢや。人間の眼といふものはな、暗い處に居れば、眼の穴が自然に大きく開いて闇でも臍氣に物が見える。それを急に松明なぞで明るくすれば、眼の穴は縮まつて仕舞つて、見えるものも、却て見られなくなつてしまふ。夜に遠見をする時には、決して松明などを點けてはならぬ。

それから道灌の千鳥の歌な。それも好え。ぢやが、古歌なんていふものも、餘りあてにならんぞ。千鳥は飛ぶ鳥ぢや。岸に居ることもあれば、沖に居ることもある。今夜は岸に居てよかつた。沖に居て見い。いよいよ一同深みへに進んでお陀佛ぢやアハ、。

そんな時にはな、まづ松明を消してしまひ、古歌なぞにも頼らず、たゞ凝つと自分の心を落着けて、静



かに眼を開いて、闇の中を凝視てゐるのぢや。さうして居れば、闇の中でも、段々ほのかに見えてくる。闇に慣れて人間の瞳孔が自から開けてくるからぢや。

さうして次第に、海と陸とのけじめが分明としてくるから、それを見極めて歸つてくれればよい。』

○ この話は、實に訓戒に富んでゐると思ふ。

人間は、やゝもすると、すぐ、頭の上に松明を點けたがる。自分だけ、分明とした考を持つて居れば、それで世間の事はみな善く分ると思ふ。ところが、自分の頭の上だけの智慧では、世間の實際の事情に當嵌らぬ事が多いのだ。あてはまらぬどころか、却て、喰違つて來ることが多い。自分は「かうだ」と思ひつめて、それで世事萬端を處理して見ても、他人の事情は、それに適合して來ない。適合しないばかりではなく、だん／＼實情から遠ざかつて行く。頭の上に松明を點すと、闇はだん／＼濃くなつて行くと同じである。

燈臺守は、暗の海を行く船を見ることは出來ない。燈臺の光をよく知るものは、光の無い暗の海にゐる船である。

人の心が眞に近づくためには、己を空しうせねばならぬ。眞實に世間を見るためには、「己の光」は消されねばならぬ。己を空しうし、自己中心の考を減じ去つた後に、はじめて、眞實の姿を見る眼がひらけてくる。

○ 念佛とは己を滅する道である。己を捨てて、眞實の眼を開きたる道である。法然上人が繰返し説かるゝ、



「愚に還れ」
の意味もその外にない。

○
であるが、宗教と云へば 人は——何とはなしに、何か聖賢の教に頼るものゝ如く思ふやうである。この轉變定めない人生の中に動がざる永遠のものとして、古の聖賢の教に従つてゆくこと、それが宗教であると思ふやうである。その謙虚な心持は誠に尊ぶべきものであるが、その餘り、一も二もなく、聖賢の教の文字に縋りついてしまふ傾を生ずる。

文字に頼ることは、また一の危険である。道灌の古歌も、たま／＼千鳥が岸に鳴いて呉れたので救ひの道となつた。沖で鳴いてゐたら、却て、危険は増したであらう。文字は、所詮「表はされたもの」である限り、何處か、必ず、局つたところがある。だから、一も二もなく、これに盲従してゆけば、何時かそれに躓いて、却て不覺な結果を産む。

取るべきは、教の「文字」でなくて、その精神である。

○
まことの道は、頭上の松明を捨てると共に、また教の文字に頼る心を捨てるものでなければならぬ。かかるすべて「外のもの」に頼ることを捨て一心忘じ去つて、己が空しくならねばならぬ。かくて後はじめて眞實の眼はひらけきたる。

——念佛者の道もまたさうでなければならぬ。

感心した人物を語る

沈黙の力

— 久米原單丈師 —

窪川旭丈

えらい議論をして人を驚歎させたり、華々しい活躍をして大向ふを感心させるやうな人物は随分と多いが、極めてつまやかに、何の不平も云はずに毎日々々を有難く送るやうな人物はなか／＼見當らない。殊に現代のやうな華美な表面許りをつくらう時世では、こんな謙虚な人は埋れてしまつて、誰も省やうとすらしない。私はこんな人こそ心から心服すべき人で、浮華輕跳の現代に一服の清涼劑ともなる有難い感謝すべき人物であると思つてゐる。

こゝに話す人物は、學者でもなく、一世を指導した大人物でもない。今では既に片田舎の草中に埋れてしまつた人ではあるが、世の中を素直に而も無我的に送つて來た人である。現代にはかゝる人が段々となくなつてゆくように思はれて、近頃と

明い街の佛心

市民館の坊さん

麻布市民館にあつて、救護法をうけるカード階級の人に親身になつて働いてゐるお坊さんの話、

東京芝區三田小山町淨土宗龍原寺の住職岡成氏の長男、前田成考（二六）さんは六年前から現麻布市民館長丸井玄進氏と親交あるところから、丸井氏が月島市民館長をしてゐる時分から救護法をうけるカード階級の人々で不幸黄泉の客となつて葬式を出したくても坊さんと呼ぶ餘裕のない人々の話を聞くと讀經から戒名まで、時には御供物迄持參して葬式萬端をやつてゐた。

段々名も知られて昭和八年麻布市民館開館以來今日迄取扱つた佛の數は數百に

みに有難さがしのばれる性格の持主であつた。

山梨の甲府工町の瑞泉寺の先代久米原單丈師がその人であるが、身を持すること極めて謙虚で、水の流れる如く淡々たる生活をした人である。二三の生活断片を拾つてみると、つく／＼その人格の光の清浄さがしのばれる。

日常の生活は非常に規則的で、夏は午前四時、冬でも五時には必ず起床する。暗いうちに勤行が始まる。一日だつて起床の時間を違へた事とはなかつた。生活も非常に質素であつたが、酒は大の好物で、晩酌は缺かした事がなかつた。併しこの晩酌も氏一流のもので、酒の爲に特別に料理を作るでもなく、又量は二合に定められて、年中減りもせず増しもしなかつた。而もこの二合の量は單に晩酌の時に守られる許りでなく、客を招いたり、客に招かれたりする時にも儼然として守られた。

『あとは皆さんでよろしく飲んで下さい』

二合だけ飲むときつとかう云つて、その後は一滴も口にしなかつた。規則正しい謙虚な生活を物語る好箇の材料である。

組寺の集會等に臨むと、皆が議論するのを黙つて聞いてゐる。そして皆の者に都合のいい説に賛成する。自分の意見をさしはさんで反對する事とはさらになかつた。

瑞泉寺は甲府の寺院の内でも、一番立派な寺であつたが、それをかさにきる風は少しもなく、大勢の人の爲になる事なら自分の不利益を忍んでまで賛成して、黙々としてその達成に努力した。だから何時も損な役はまづ先にひきうけると云ふ具合で、皆の人の後に従つて私利を殺して仕事を進めて行つた。かう云ふ人格の持主であつたから、自ら組寺の中心となつて、萬事をうまくまとめて行つた。これと云

遷して、近頃では『市民館の坊さん々々』と人々に親しまれてゐる。前田さんは語る。

『こんなことを思ひ立つたのは學校時代の先生唯尾辨国師と玉蓮院主古屋諦道氏との指導に預るところが大であります。御教を實行に移したに過ぎません。幸ひ丸山さんと親交がありますので、不幸な



方々の話を聞くと出掛けて行くことにしております。こんなことは我々のやるべきことで、何も珍らしいことではありま

ふ藝能もないが、それで門中の中心となる——無爲にして果すると云ふか、謙虚な人格の力の然らしめた所であらう。

また檀家にもすゝんで宗意安心を説くでもなく、御世辭を云ふでもなかつたが、非常に信頼されて、約五十年の長い住職中、一度だつて檀家の間にイヤな氣持を起させた事はなかつた。圓滿な人格、無我奉仕の生活、これが師の一生であつた。

最後に一言したいのは、弟子を慈しみ育てた事である。叱ると云ふ事は殆どなかつた。打つなんて云ふ事は絶體に出来なかつた。食物も總べて弟子と同じで、夏等に腐りかけた御飯でもあれば、自分が先に食べて暖かい御飯を弟子達に食はせる。また起床でも、自分が先に起きて、それから弟子達を起す。それも無理に起さうとはしない。かう云ふ具合で至つて弟子思ひであつたから、弟子も師に心から心服し現在では三人の弟子も各々師の名をついで相當に立派な生活を行つてゐる。

こゝまで語つて來たが、實を云ふとこの人は私の師匠であつて、生存中はその有難さ、えらさがよく判らなかつたが、死んでから——震災の前年に死んだが——十數年たつた近頃になつて、始めてこんな人こそほんとに偉い人だと思ひ當つた。

人間は生きてゆく限りは、本願廻向の力を持たねばならぬ。この力が十方衆生に廣く行きわたるか、親近の者等に狭く現はれるかの違ひはあらうが、誰しも持つべき力である。今の世にはその力を人に廻向すると云ふ人が段々少くなつて來た。久米原師こそこの力をくまなく興へた人である。弟子等の側近周囲の人から、組寺・檀家等へと段々廣く自分の修業の力を廻向して、後顧の憂なく活躍せしめ、自分の事は少しもかまはなかつた。

現代には先に立つて行く人はいくらでもある。理窟を云ふ人はかなりゐる。併し

せん。」

郵便屋さんの感謝

四月も末のこと、一人の郵便屋さんが市電三輪車庫を訪れて、

「これは誠に僅少ですが、従業員の慰安資金にでもお使い下さい」と金一封を差出した。

これは下谷郵便局集配人の春田柳吉さんで、先きの遞任記念日には廿年勤続の忠勤振りを讃へられて表彰された方、その時金一封三十圓を買つたので、自分が表彰されたのは偏に市電従業員諸君の努力に依るものであると常に感謝しておつたその心持を幾分でも形に顯したいと、その一部を割いて、贈物としたものである。

従業員達もこれにはいたく感激し、中村電車課長の許可を受けて有難く頂戴した。職業柄當然といへば當然のことに、他人の力をこれ程に報いるのは有難いこ

人の後について行つて、自分の力を他人や弟子に廻向し、後おしをし、進む人を進ましめる人は殆どゐない。

この時世に、この人物、久米原單丈師こそほんとに有難い感謝すべき人物と心から景仰してゐるのである。

災難は世の常

——坂根彌兵衛翁(四)——

増上寺法主 大島 徹 水

佛・法・僧の三寶を敬ふこゝろ——この日常の翁の心得は、同時にあらゆる人々に對する深い思ひやりの態度となつてあらはれてゐた。寶の維持者である僧侶に對しては、それが如何なる姿、形をしてゐやうとも、拜む心で接したのは勿論であるが、自分より目下の者達をもけつしておろそかにしない翁だつた。

世間には人を批評するのにその短所ばかりを拾つて難ずる者がある。翁はその反對に、長所のみを見出して人を慕つたのである。さう云ふ翁にとつて、自分の店で働く若い者達を大切にすることは一入であつた。「若い者には將來があるから、よく面倒を見て置かなければならない。」と翁は云つてゐた。また店の丁稚などに向つて

と、朗かなニュースではある。

子供と強盜

五月一日早朝、東京蒲田區町屋町富永守治さん方の裏口を押し破つて主人と子供さん三人で寢てゐる枕元にぬつくと立ちあつて、

『強盜だ、金を出せ！』

とおきまり文句を並べたので、お父さんの守治さんはぶる／＼震へて、

『葬式を出したばかりで、金なんかありやしないよ』

と先月死んだばかりの先妻の連れ子百合子さんの眞新しい位牌をみせました。流石の強盜もこれを見て佛心を起したのか、

『でも少し位ゐるはあるだらう』と急におとなしく出ました。

この時傍で寢てゐた静江(九つ)さんはお父さんの危険と見て

『お父ちゃん、こはいから、昨日貰つた

客扱ひの心得として次のやうにさとした。

「お客に對してはたゞ物を賣りさへすれば用が足りたと思つてはならない。お前達が店で働くのはお前達の修業と心得ねばならぬ。物を商ふには向う様の便宜をはかり、物を使つて戴くといふ心掛で當るやうにするのだ。」

× ×
何か人事問題が起つた場合、理窟の解決よりも、當事者間の心もちを汲んで無理のない始末をつける——これもまた翁のつねに行ふところであつた。翁の親しい友が、家族間に不和を生じて翁に解決方を依頼したことがあつた。そのとき翁は、當事者双方の云ひ分を聞き終つて、

「私は道理を調べて甲乙をつける資格はない。しかしご双方のお心持から事の判斷をさせて戴けるなら、何とかうまい解決方法を見つけませう。」

かう答へて、じりじり双方の心の奥底にあるものを看破して、遂に仲裁の役を果した例があつた。それゆゑ、翁のさう云つた仲裁解決の仕方には、いつも長い時日を要するわけであつたが、ひとたび翁に世話された者は、それが生活指針となつて精神的に得るところ多く、終生の信用を翁に對して抱くやうになるのだつた。従つてこの方面の翁の感化は、すばらしかつた。

京都の或素封家が、當主の無方針の亂行から没落に瀕したことがあつた。親戚、や知友の忠言一切を受け入れず、當主の我儘は募る一方で、誰もどうせうがなかつた。名士も多く仲に立つたが失敗に終つた。結局、全然他人の翁のところに解決方をもつてゆき、約半年かゝつて當主の心を正道に戻し、一族和合、家を立直せしめた話は、未だに彼地の語り草となつてゐる。

わたしのお小使をあげてよ」

とおろ／＼聲で哀願したので、お父さんは毎月月給日にきまつて子供に與へて



ゐたお小使の五十錢銀貨を一つ強盜にやると、強盜もこの小供の眞心にうたれたと見えて、おとなしくそれを握つて引下りました。

★

★

★

翁が人をいたはつた例は、いろいろの方面に亘つて盡きない。

毎年、知恩院の信徒が地方から参拜にのぼつて、本山への寄進その他についての相談には、翁が一手に引きうけて親切に世話してゐた。そして一度翁に接し、翁の世話をうけた信徒は、永く翁の懇切な心づかひを記憶に留めてゐるので、以外な地で翁をほめそやす聲に觸れることがあつた。

常には京都在住の信徒が、凡そ佛事に關することは、すべて翁のところに依頼を持込んだ。法要、葬式、寄附、などについての寺へのしきたりは一切翁に相談をかけてから、といふ慣はしが、知らず識らずに成立つてゐた。それほど翁は佛事となると、自分を犠牲にしてまで動きまはつた。八百三といふ有名な精進料理店の月の大部分の仕出しが、すべて翁の世話に依る佛事のそれであつたことでも、その一端が覗はれるであらう。

純正頭腦藥

最も進歩した

頭痛に



頭痛に一言
國語に無害

頭痛で頭がワレル程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される様にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と迄行かなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、徹夜讀書、觀劇後等で心神の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられよ。今ノーシンをのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ喉嚨から抜け出て來た様に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉強、讀書、家事、裁縫等を續けることが出来る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十圓、五十圓、一圓。全國の藥店やデパート藥品部にて販賣す。

町京區東市原古名 社會名合部太長川荒 元造製

然しながら、翁のさうした外の奔走は、やゝもすると自家の業務に差支へる場合を生じるので、時として番頭の忠言に出會ふことがあつた。が、翁は、快くそれを受けながらも「私の家は神佛のおかげで立ち直つたのであるから、もし家が傾くやうになつたなら、それは佛へお返しすることに等しいし、私としては心残りのありやうはずがない。どうかこの私の心を承知してゐて欲しい、」

佐藤春夫著・小杉放菴挿繪並装幀

法然上人
別傳

掬水譚

△限定出版 壹千部
△定價四圓五十錢・送料廿二錢
△七八寸特製ノート型・天金・十二
ボ総振假名・約三百頁・美麗函入
△放菴畫伯に依る……装幀、見返
し、六十四葉挿繪(琥珀版)
△兩大家一致の想になる
豪華・絢麗版
一部を備へて
家寶とせられよ

文豪佐藤先生の流麗圓滑の文と畫壇の雄小杉畫

伯の枯淡風雅な挿繪になる昭和に生きた法然上人傳!

宗教文藝の精髓・千載に光彩を放つ。

過般大毎東日兩紙に連載し、百萬の讀者を魅了したるもの。俗に媚びず、難に墮ちず、作者自ら淨土の信仰を摑み、一篇一篇悉く念佛の溫床に育成された宗教文學の最優なる創作。

◎著者署名の特典

特に記念の爲め、法然上人鑽仰會への直接註文に限り、著者署名す。

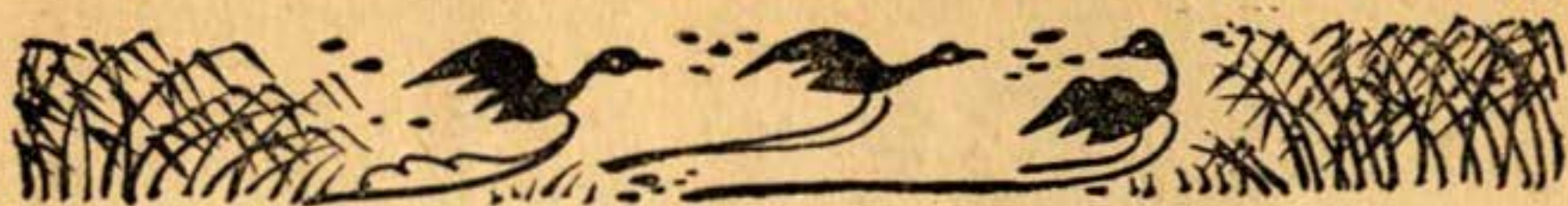
法 然 上 人 鑽 仰 會

かう答へては笑つてすごすのであつた。

翁の日頃の念願は二つあつた。三 三所^{さんさん}普^ふ参^{さん}拜^{はい}と四國八十八所靈場巡拜^{しよがいりやうめぐりはい}がそれである。三十三所^{さんじさんじ}の方は、商用^{しょうりやう}のあひ間にどうやら参拜^{さんはい}できたのであつたが、四國^{しよこく}は遠方^{えんぱう}でもあるし、その時日の豫定^{よてい}もなかなかとれず、長い間巡拜^{めぐりはい}を果せず^{はたせず}に過してゐた。それが明治四十二年の秋頃、やつと念願^{ねんがん}が過つて旅立^{たびだて}つことが出来た。ところがその年は妙に京都に火事が多く、丁度翁が出立して十日後に、運悪く翁の所有^{しやうりやう}の借家^{かいか}、店の倉庫^{くらぐら}が火災に罹つて焼け落ちたのであつた。そこで家から至急歸^きれの電報^{でんぱう}を翁に發した。翁は出立前に宿所豫定日^{しゆくしよよていじつ}を細々と調べて書殘^{かざん}して置いた。またつづいて翁の知友^{ちゆうゆう}からも知らせが飛んだ。しかし、翁からの返信はなかなか来ない。家の者は氣が氣でなく焦燥^{せうそう}してゐると、三日経つて、やつと翁のたよりが届いた。早速開いて見ると落着いた筆蹟^{ひつせき}で、次の意味の文面^{ぶんめん}が認められてゐたのであつた。

「——火事とか人の死は世にありがちのことです。別にあわてる必要はないと思ひます。かういふ不慮^{ふりよ}のことがあるからこそ、私は巡拜^{めぐりはい}に出てゐるのです。私は佛に誓つて、身の修行^{しゆぎやう}をしてゐるのですから、それが済むまではかへれないのです。氣の毒とは思ふが、皆の者で後始末^{ごしまつ}のことをよくして置いて下さい。私はますます信仰心を増しました……そして燒跡^{やけどあと}の仕末^{しまつ}新建築^{しんけんちく}の仕方が書き添へられてあつた。翁はそのまま無事八十八ヶ所巡拜^{めぐりはい}を思ひのこしなく、成し遂げて戻つて來たのであつた。





續念佛偶記

佐藤春夫

禱の中の禱

主の禱は儲に禱の中の禱である。けれども——若し總じてそれに對して一つの批評を試みることに、何かそれを批難することが許されるとすれば——私は、それは餘りに長い、餘りに冗漫に失すると言はざるを得ぬであらう。總ての祈願は畢竟第二の「御國を來らせ給へ」の中に既に包括されてゐる筈である！他の事は措いて、獨りこの事のみを人間に日毎に、時毎に、否不斷に祈願すべき筈である。さうしたならば其他の一切も亦彼に與へられるであらう。(中略)世界過程を促進せしめ、萬人を——生者をも死者をも——その懷に收容し

(略)その終局目的(神の國)に達するやうにと祈願するといふことは(以下略)

これはケーベル博士續小品集の三頁から四頁にかけての一節からの抄録である。ケーベル博士は年久しく東京帝國大學の教授としてその學德を敬慕された哲人である。この人の文集の中からこの語を見出すのは自分にとつては頗るよろこばしい事である。

自分は主の禱といふものは實は知らない。けれども前記の抄録のなかで「總ての祈願は畢竟第二の「御國を來らせ給へ」の中に既に包括されてゐる筈である！」と云ひ、更に語をつづけて「他の事は措いて、獨りこの事のみを人間に日毎、時



毎に、否、不斷に……」と語つてゐるのを見ながら、ケーベル博士の言はんとするところが何となく連續的の念佛のすすめに似てゐるのを感じて古今東西、眞の智慧を惠まれた人々の所見は期せずして一致してゐるのを見るからである。

「南無阿彌陀佛」とは要するにケーベル博士の所謂「御國を來らせ給へ」である（それとも「御國に到らしめ給へ」であらうか、所詮は同じである）さうしてケーベル博士は「獨りこの事のみを人間に日毎に、時毎に、否、不斷に祈願された」といふ。萬人を——生者も死者をも——その懷に收容させたいといふその終局目的の「神の國」といふのはどうやら我々のいふ「佛の國」淨土の事ではなかつたかとさへ思はれる程ではないか。

法然上人を知らなかつた異邦人のケーベル博士はクリストを知つて、しかしクリスト教の信者ではなく、けれども眞にクリストを理解し拜跪するものを以て自任して「クリスト者」といふ特別の言葉で以て自分を呼んでゐた有徳の哲人であることを改めてここに特記して置かう。この哲人は既に先年濁世を去つて、生前何人も彼と法然上人やその念佛を語つた人があつたといふ話は聞かないけれども、自分は前に引用の一節によつて、この「クリスト者」は同時に、我々の「法然者」であつた事をも信じて疑はぬ者である。

拙作「掬水譚」について

自作に就て吹聴がましい事をするのなら差ひかへた方がよいに相違ない。しかし今、自分は拙作に對して是非とも一言しなければならぬ。かと考へて見たり、或はさればこそ却つて自分から公表するのが適當かと思つて見たり惑ふ次第ではあるが思ひ切つて全文をそのまま次に掲げよう。

昭和十一年三月八日

淨土宗立東京布教講習所にて

藤井實應

かねて東京日々で拜讀してゐたのですが、連續して讀むことが出来ませんでしたので、今度、大東出版社から御發行の書を購入し、一気に拜讀新しい感激を覚えまして、失禮もかへりみず筆をとりました。

豪華版、美しい装頓、小杉先生の優雅な畫すべてがありがたく、今迄種種もの法然上人傳を拜讀しましたが、全くそれらと異にした清新な感じを以て拜讀し得たことを厚く御禮申上ります。

法然上人のみおしへに生きる一人として幾度もおしいたゞ



き合掌し、念佛申しつゝ、ありがたさに満たされては拜讀しました。

殊に建禮門院右京大夫を中心に第四卷乃至第八卷あたりなと當時の没落階級の悲哀や、人心の不安のすがた、その中に鑑として悠歩せられた上人のおすがた、そして念佛の光明によみがへる人々の悦びなどまのあたりに拜する心地がいたしました。最後の一枚起請文のところはいつまでも頭にのこつて、本をひろげたまゝ、瞑目、お念佛申して離し得ない感がありました。

いつか傳通會館で鑽仰會主催の座談會のとき承りましたが、此後にも上人傳を書きたいといふ御希望を述べられましたが、どうか是非御願ひ申上げたいものと衷心より御願ひ致します。

御流罪中の御教化、海人漁人田夫野人への教化、遊女への御說法、それから新興武士階級への傳播の模様、尼將軍の歸依等の方面をくはしく描いていたとき度いものと勝手な願ひをもつてゐます。

なほ拜讀中氣づきました二三の點を述べさせてもらひます。

一、十二頁「華嚴の戒律」云々、私共佛教を中心に學んだもののに、この言葉が變に聞えます。華嚴は天臺と共に佛教哲學

の最高峯を示すものにて、十重無盡の法門、法界緣起の深奥な哲理を説くもので、戒律なきにあらざるも華嚴の戒律といふは不適當でせう。戒律ならばむしろ律宗であります。

二、一六三頁「しかし本日の間答で源空は機根に於ては最も立優つてゐるやうな氣がする」……いふほどの意味である」とあります。これは「機根くらべには源空勝ちたりき」との上人の言葉から出てゐるものかと思ひます。そうであるとする、「自分ほど身についた佛教を修行してゐる人は外に見當らなかつたのを知つたといふほどの意味である」といふのは大に意味がちがふ。もしかやうなうぬぼれめいた言葉が上人の言葉とするならば、それは所謂機慢心の致すところ、法然上人の極力いましめられたところと考へられます。(七箇條起請文の中に「げに／＼しく念佛を行じてげに／＼しき人になりぬればよろづの人を見らにみなわが心にはおとりたり……返す／＼も機慢の心をおこすべからず」とあります。

勅修御傳第六に

大原にして聖道淨土の論談ありしに、法門は牛角の論なりしかども、機根くらべには源空かちたりき、聖道門はふかしといへども、時すぎぬれば、いまの機にかなはず、淨土門はあさききにたれども當根にかなひやすしと、いひしとき末法萬年餘經悉滅彌陀一教利物偏増の道理におれて、人



みな信伏しき、とぞ仰せられける。

とありますから「機根くらべには源空かちたりき」の前後の文を見るとその意味は（聖道淨土の法門を機の上下に合せ考へてみると、淨土の法門のみ當今末法の機根にかなふ法門であるといふことが明かであるから、それで機根くらべにはわれ勝ちたり。）とのたまふたものと考へられます。何か座興にことよせてかやうに仰せになつたと思はれますが、「自分ほど身についた佛教を修行してゐる人は外に見當らぬ」といふ意味とは大に異なるものあるを感じ、此處だけがどうも法然上人のおすがたとちがつた感じで讀みましたので特におこがましく書きならべました。

三、一九八——二〇〇頁、選擇集の紹介がありますが、一九八頁に「選擇集第二段は」とありますが、選擇集は古來より十六段に分けてをります。それによれば、こゝに第二段とあるは第一段の私釋段にあるもので、第二段といふは間違ひでせう。第一段の中にあるものです。

二〇〇頁「第三段には善導和尚正維二行を立て、正行に歸するの文」とありますが、これが第二段にあるものであります。そしてそのすぐつゞいての文に「阿彌陀如來は他の行を以て往生の本願とはせず只念佛を以て……」が第三段の念佛往生本願篇の説明であります。

第一段 聖道淨土二門篇（道綽禪師聖道淨土の二門を立て、而も聖道を捨て、淨土に歸するの文）

第二段 捨難歸正行篇（善導和尚正維二行を立て、難行を捨て、正行に歸するの文）

第三段 念佛往生本願篇（聖道如來餘行を以て往生の本願としたまはす唯々念佛を以て往生の本願としたまふ文）

なので、ですからあそこが少し混同してゐますから御參考までに申上げておきます。

四、二〇一頁「書卷の題名は本願から重要なものを選択して念佛を採るといふ意味であらうと思はれる」

これは獨斷の見解といはねばならぬでせう。阿彌陀佛の本願は二百一十億の諸佛國土中より精妙なるものを選択捨取されてお立てになつた本願ですから、阿彌陀佛の本願はそのまま選擇の本願です。この題名に就ては、聖光上人の徹選擇に次の如く釋されてあります。

「先づ本選擇集の題に就て此に三義あり。所謂第一に本選擇集の題中に念佛といふは是れ諸師所立の口稱の念佛なり、故に題の次の行に南無阿彌陀佛といふなり。第二に本選擇集の題の中に本願といふは是れ善導所立の本願念佛なり、故に題の次の行に南無阿彌陀佛と言ふなり、第三に本選擇集の題の中に選擇と言ふは是れ然師（法然上人のこと）所立の選擇念佛なり。故に題の次の行に南無阿彌陀佛と言ふなり。是の故に本選擇集の題中に三重の念佛の義ありと雖も俱に觀念の念佛にあらず、但だこれ口稱の念佛なり。」



云々」

又淨土宗第三祖は（記主禪師）は決疑抄に

「選擇本願念佛と言ふは本願義の上に於て更に選擇の一義を加ふ、此はこれ祖師上人（法然上人）大阿彌陀經に依つて始めて此義を立つ。所謂その本願とは二百一十億の諸佛の願行の中より選擇したまふ所の本願なればなり」と。即ち選擇本願の念佛は彌陀の選擇したまへる本願の念佛なると共に、また法然上人の一代佛教より選擇したまふものです。換言せば、彌陀が二百一十億の諸佛の願行の中から稱名の一行を選擇したまひしと同じく、上人は一代聖教の中より本願念佛の一法を選擇したまふたのであります。かやうな意味で法然上人の最も主張せんとせられた選擇本願念佛に關する要文を集められた書といふ意味に解せねばならぬと考へられます。

専門的なむづかしいことをいつてすみませんでした。

五、二八四頁、攝引縁は引攝縁の方が正しいと思ひます。

八九頁盛者必滅は生者必滅か、盛者必衰か？

失禮もかへりみず遠慮なく愚見申述べましたこと悪からず

御諒承下さい。

南無阿彌陀佛

以上の通り半ビラ書簡箋十葉に謹嚴な細字で淨書した長文

の手紙である。拙著に對して今までに與へられた手紙、及びあらゆる批評のうちで作者とし最も異議のないもの二つのうちの二である。序にもう一つの事を記せばそれは拙著「陣中の堅琴」に對して與へられた上村清二氏の書簡である。ともにその態度の謙虚で専ら筆者の蒙を啓かうとする深切の溢れてゐるのと申し分の一々尤もなものとに服するのである。

前掲の藤井氏の手紙のみに就て言へば最初の一二葉片は禮辭と見るべきもので過賞取へて當らざるものであるが、それにつづいて述べてゐられる、この後に執筆する場合の希望として「御流罪中の御教化・海人漁人」以下の數十字こそ拙作全體に對する不滿をその事とはなく洩されたものと解して、作者たる受信人も一々肯定した。あの作は紙員の都合からほんの上人の輪廓しか書けなかつたもので、作者もそれを慚かず遺憾としてゐる。従つてあの作に書き洩した細部の面白い部分に幾多の趣のある部分を逸してゐることは十分氣づいて居るから、改めてもつと自由に書く機會を得たいと思つてゐるわけである。

五つの項目で詳細に高教を垂れられた點に至つては作者は一言もなく恐れ入るの外はない。みな作者がその方面の専門知識に缺如してゐる事實の暴露に外ならぬ。作者は執筆に先



立つてこの危懼を十分感じてゐたから多少の参考書に眼を通したつもりでゐたのに、何分速成の知識で執筆中も自分ながら疑義を生ずる節が多かつたが身邊は質疑に應じてくれる適當な方の見つからないのを歎いてゐたのに果してこの過の數々をしでかしてしまつたものであつた。

尤もこの項の「機根くらべには源空勝ちたりき」に關する件では、筆者はこの言葉の理解の上では藤井氏と殆んど同じように解いてゐたつもりであつたのが拙作の句が短い上に不文の不備で藤井氏の説かるる如く上人の盛徳を傷ける結果になつてしまつたのは甚だ自ら愧づるところである。假りに「身についてた佛教」といふのを「人間生活に即した」とでも書いて置いたらまだしも幾分は讀者に與へる誤解が少くて筆者の述べようとするところを多少能く傳へる事が出来たのであつたかも知れない。なほ選擇集の紹介が混雑してゐたり、解題が獨斷の誤に墮してゐた點などは作者の淺學無識に因るものであるから讀者諸君も幸に寛容されて、藤井氏の説に源づいて訂正して頂きたい。五の項の佛教用字の誤も汗顔に堪へない。自分は能ふ限り加筆して再版の機會にはこれ等の誤を正したいと思ふが、中には簡單には訂正しにくいものもあるし、また既に初版本で所載して居られる向に對しては以上の過誤を明記して置く義務を感じた者である。

拙著は執筆中にも出版前にもそれが校正などの折にも、即ち機會ある毎にはなるべく多く専門の方々の意見を確めて過失を勘くしようと思つたがけだ等であつたのに根本があやふやなものだけにこんな失態を終に免れ得なかつたわけであらう。尤も藤井師は専門家中の専門家と申してよい方と思はれるから今この方から忌憚なく教を得た以上はもう想應な高等批評に當面してしまつたものと考へて、作者も或る程度は安心も出来るわけである。

最後に、事に紛れて遂にまだ御事も差上げず 従つて御禮も申述べてゐない藤井師に對して、滿腔の感謝の意を捧げたい。

家族の一員



『あれはもう家族の一員と

同様で御座います

わ

『あら、

御家族の誰方様と

と

若奥様はすま

して訊い

口うるさい親類共が、いふ夫婦を訪問して、談話の偶々彼等の飼犬、大犬、小犬、及んだ。親類共の一、人高慢ちきな奥方が云つた。

た。

往生繪卷



十一月
杵谷義三郎作
杵谷真徳画

奇蹟

1

奇

蹟

(27)

町外れの萩寺に去年の秋から、とても大男の門番が雇はれた。江戸の本所にもおなじ名前のおなじ言ひ傳へを持つ寺があるが、此地のは、むろんあんな立派なお寺ではありません。山號も寺號も別にちゃんとおるのですが、町の人々は剃ぎ寺と呼んでゐました。つまりこのあたりに追ひ剃ぎがしきりに出沒したんです。なにぶん、中仙道の往還をちよいと外れた小さな城下町でした、たとへば政府の忌諱に觸れた學者とか、作者とか、が江戸を遁れてこゝに隠れたことも多く、同時にまた、江戸拂ひになつた無賴漢、やくざ浪人と云つた輩が流れ込んで来て、それらが剃ぎ寺の縁起になりさうな悪事を働いたと見えます。

そこで和尚が、江戸の眞似をして四五年まへから境内に、萩を植ゑて、以後は萩寺ちやと、檀家へ觸れてまわり、一同も秋ごとの豊饒な花のうねりに見惚れながら、名所が一つ殖

えた氣で、檀那寺の宣傳をしたわけです。

さてこの萩寺に、ふとまた名物が一つ加はりました。——もともと和尚一人に小僧が一人、ぼろぼろの土堀に圍はれて、寂しく荒れてゐたその寺の、廂の朽ちた門番小屋に、直助と云ふ途方もない大男の、——しかも偏癡の門番が、ふつと現れた……ちやうど去年の秋ぐちの、ひと雨ごとに萩の花が咲きこぼれてゆく時分のこと。

その直助が、ひどく荒削りな顔をして、いつもむうツとしてゐながら、とき折り、突拍子もないことを云ひ出して、檀家の衆を笑はせます。

實は彼は、色が淺黒くて、眼が變に光つて、どこか肝に毛でも生へてゐさうで、第一印象はあまり良くない男なんです。ひよつとしたらこれア兎狀持ちかも知れないぞと、そんなことを考へた者もあつた位です。

實際、それを懼れて、和尚に問ひ訊した男がゐました。和尚が、そのとき、からからと笑つたんです——

「兎狀持ちはお互ひではござらんかな？」

さう窘めておいてから、茗をすゝつて

「彼奴の生國は、娑婆ぢや。娑婆で不可ねば、武州北埼玉郡……しかもこの萩寺の庭の萩の中……委しう申せば、狸でござる。」



聴きてがぼかあんと口を開けたまゝ、和尚の顔を見つめま
した。

「實はの、ついこの盂蘭盆の、盆燈籠に夜露がしげくなつて、寝待
ちほどの月の出潮——ついこのわしが、庭におりて、ひとり浮れて
ゐたと思つて下され。すると喃ふと眼のさきの萩が揺れての、ひ
よいと顔を出したか。

和尚。

と友達みたいに呼ぶ。

——何ちやい、狸公？

——人間になりたい。

——いまさら！

と云つてやつたが喃。それから

——廢せく、人間は不自由ぢや。

するとの、狸奴、考へをつたかの、かぶりを劇しく振つて

——判らん！

と云うた。

——判らんか、はて、判らぬか、これしきの道理が……？

——わからん……

どがつくり項垂れる。あはれなものぢや。

——判らねば云うて聴かす。人間はの、即身成佛と申して、佛に
しかなれんのぢや。おぬしは、それ、人間にも化けるわ、怪物にも
化けるわ、木石器物、何でも思ひのまゝぢや。月夜には腹鼓をうつ
てをればよい。何を苦しんで……

と云ひかけるを劇しく遮つて

——化ける話ぢやない。腹鼓は飽きた。

——なら、さつさとなるがよい。雑作もないことぢや。

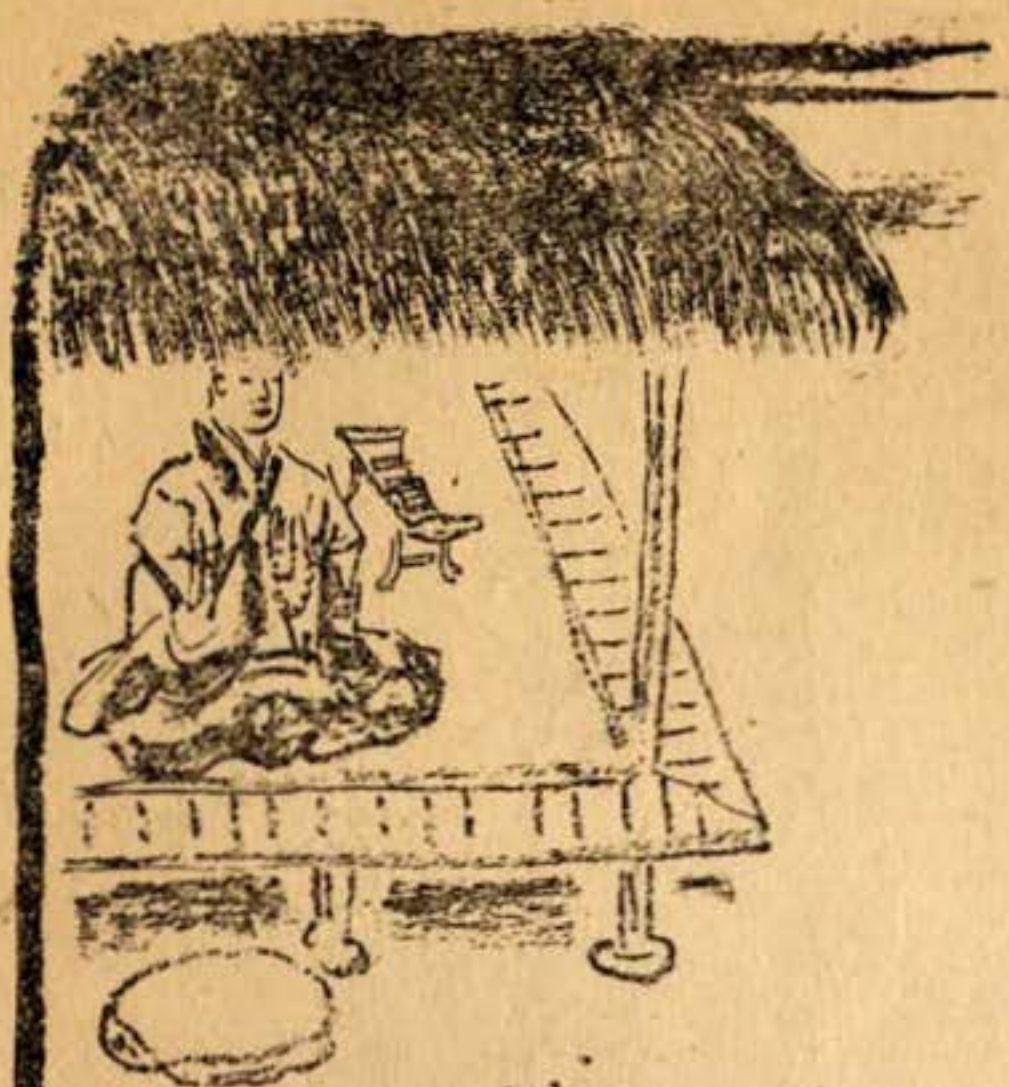
——それが判らん。毎晩考へたが判らん。和尚、教へて下され！
これ、腹も鼓にならんほど、瘦せて苦勞をしてゐます。
——ふむ、よい、教へて遣はす。なむあみだぶつ……念佛を稱へ
ろ。

——念佛とは何ぢやい？

——なむあみだぶつ。

——たつたそれだけか？

——うん。それだけぢや。



——ほんとうか、和尚!

——うむ、狸をだまして仕方がない。

——手頼りないが……騙される氣でやつてみやう。

いや小理窟の多い狸奴であつたが、大きな聲で、念佛を稱へをつた、すると喃、その聲の終るか終らぬうちに、もうあの直助めになりをつて喃、ははは、ざつとかやうな次第ぢやが、たゞ、悲しいことに迷ひが遣つて、あの脊中のあれぢや。なに、あれも、いづれは念佛のおかげで癒うなるに違ひない、わしはそれを信じてゐます……」

聴きてが、和尚の眞剣な顔を見ながら、お辭儀をして、ひき退りました。もちろんこの話はそれからそれへ、ぢきに檀家中に擴まりましたが、誰だつて、直助を狸だと思ふ者はありませんでした。

2

ところが、間もなくこの門番が、狸の直助さんと、みんなから呼ばれるやうになりました。いえ、これあ、和尚の話には全然關係がないんです。

と云うのは——いつたい直助と云ふ男は、先ほども申しあげた通りの、頗る損な外貌をしてゐる。口も實に重い。その口で、前記のとほり、時々突拍子もないお喋りを始める。かと思ふと、ふいと喚くやうに、念佛を稱へたりする。檀家の衆には、それが悉く可

笑しい。笑ひを咬ります。また彼は、折々、何とも知れん悲しい表情をすることがある。それも、人品が人品だから、やつぱり可笑しい。もつとも、人々がかうして彼を一種の道化者視するまでには、「狸の直助さん」と云う印象が、みんなの頭に深く刻みこまれた、そこも大いにあるのです。

さてその狸の直助さんの由來ですが……

あるとき、或る檀家の家族が墓參に來て、直助が、いつもの通り、手桶の水、花、線香などを、むつつりと提げて、その後に従つて本堂裏の墓地へまいりました。御承知の大男で、個儼——猫脊にのつそのそと萩の中を歩いてゆく姿が、ちやうどその肩に喰ひこんだ首だけ、みんなの頭の上に出てゐる。それが

「なむあみ……」

と熱湯に浸つたときのやうな聲で、ふいと唸つたのです。

はじまつた!とその墓參者たちが、彼の顔を振り仰いでわらひました。

「狸だ、狸に違ひねえー」

と、みんなの笑顔を悲しげに見おろして呟きます。

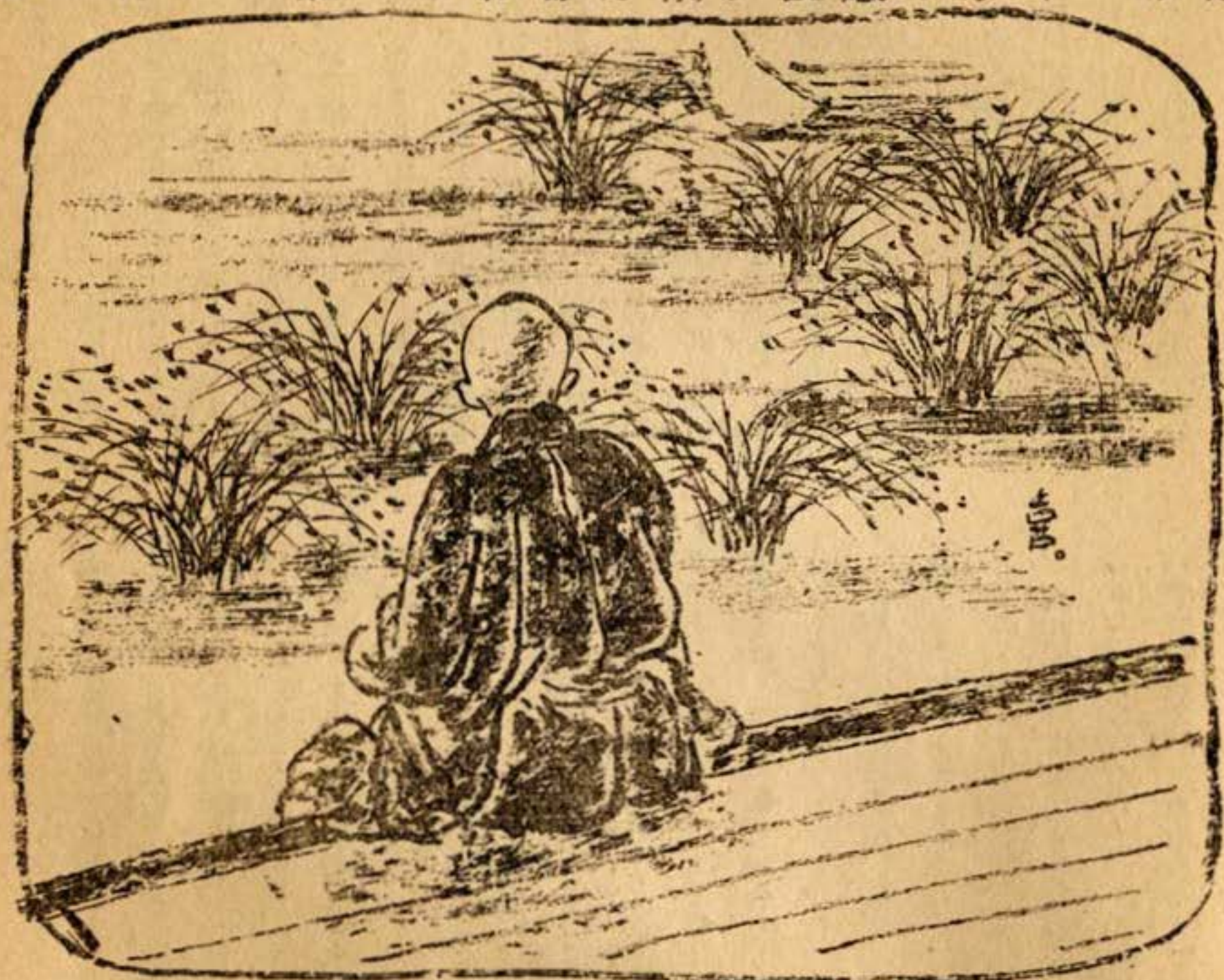
「直助さん、ぜんたい何のことかね?」

さう云つて主人が尋ねました。

「何でも狸だよ。ひよつとすると、おいらの和尚さんも、狸だ。だんな、さうぢやねえか? だつて、説法が……なむ……!」

むうツと口を滅ぢて考へこんだ
が、ぢきに、訥々と喋べりつゞけ
る——

「和尚が、おいらに聴かせた話だ、
攝津の勝尾寺とかに、お上人があ
つたんだ。なんでも大變な學者で、
思ひ切つた修業をしたさうだ。庵
室に五十何年こもつて、念佛の修
業、そのあひだ、五日に一遍しか
ものを喰はん。それから無言の行
を十二年……人の來るのを嫌つた
さうだ。とつても偉えや！人を寄
せつけねえのはもつともだ。それ
にだ、なんでも貞觀八年とやら
の芋名月の夜、虚空に音楽が聴こ
えると思ふと間もなく、庵室の柴
の戸を叩くものがあつた、なんし
ろこつちは無言の行だ、返事はし
ねえや。暖ばらひだけしたさうだ
が、すると、外で、わしは播磨の
加古の邊に住む沙彌の教信と云



う。これから極樂往生をしようとこ
ろだ。おまへさんは、來年の今日
往生なさる。それを云ひに來た。
その聲が終ると、庵の中が急にば
あつと光つて、虚空の音楽が、西
の方へ遠退いていつた……ふん
こいつア狸だ、ねえ、だんな、狸
に違ひねえと、おいらア思ふ……
……ところがね、お上人が、おどろ
いて無言の行を廢しちやつた、そ
して弟子を呼んで、この話をした
んださうだ。それから、夜が明け
ると、その弟子を、播磨の加古の
邊へやつて、教信と云ふ尊い坊さ
んはゐないかと、尋ねさせた。と
ころが、誰も知らない。そんな筈
はないと依姑地になつて訊いてま
わるうちに、この十五日の夜、死
んだのは、つい街道を北へ入りこ
んだあばら家の主、三十年ばかり
道中の荷擔きをしてゐたが、たう

とう死んぢまつたからその屍骸を道ばたに捨てちやつた。たしか念佛の信者だから、ひよつと訊ねなさる人かも知れん。と教へて呉れる者があつたので、すぐそのあばら家を訪ねたと云ふ。訪ねたら、家の邊に、鳥があつまり、狗が寄つて死人のからだを噛みちらす、傍に石があつて、その上に新しい首が載つてゐた。この首が、眼も口も、生き／＼としてわらふやうだつた。家の中を見ると婆さんが、一人の子供を抱き寄せて嘆いてゐる。その婆さんが云うには———そんな死人は亭主の教信でございます。十五日の晩に亡くなつたから、遺言どほりにかうして、死骸もかくさず、野ツ原に捨て、狗の餌食にしてをります。假の世界とは云へ、一生人にやとはれ、重荷を擔ふて辛い渡世に日を送られたことを考へて愁嘆してゐますと、あはれな話……弟子がとつて返して、このことをお上人の耳に入れた。するとお上人が———わしの無言の行も、この荷擔ぎの教信に及ばん、とつくづく悟つて、それから念佛三昧に入つて、その來年の八月の十五夜に、ほのかな音楽と異香の薫じるなかに入滅せられたとある……なむあみ……なんまみ……なまい……は、は、は、だんな、おいらにア、この話が、ちつとも判らない。和尚は得意らしいが、和尚もお上人も、こいつア狸に一杯喰はされちアるまいか……いや、和尚は、何でも知つてゐるくせして、とんだ狸の口まへで、おいらを騙すンぢやねえか……ねえ、だんな、何だか安神がならないぢやござんせんか……」

それだけ話して、直助は「なアむツ」と疼くやうな聲で、尻切れとんぼの念佛を吐き出して、ぎゅつと口を緘みました。一同には、直助の話の内容など、てんで問題ではありません。たゞ直助の様子を見て、それから十八番の「狸」を聴いて、わけもなく興がつたゞけでした。直助も強ひて同感を求めるでもなく、話すだけ話してしまふと、あとはまた、むうツとしてゐました。それがいよいよ皆を笑はせたのですが……

3

「狸の直助さん」については、またこんな話も喧傳されました——ある種家の若いものが、御隠居のお供をして參つて來たことがあります。御隠居が方丈で和尚の話聴いてゐる間、若い者は門わきの直助の小屋の瘡癩線香などおいた見世さきに腰をおろして油を賣つてゐました。

「直助さん、お前さんは當寺は新しんだから萩寺の謂れ因縁についてアまだ何にも知るめえな？」

「知つてるよ。」

と直助が無難作に答へたものです。

「ほう、知つてるか、それア豪勢だ、云つてみな。」

「つまり萩を植ゑたから……」

「おつと、その前だ。」

「前か、前は、やつぱり剃き寺だ。」

「委しいの。」

「うん、お前さんよりはね。」

「へん、ぢアその剃き寺當時、噂にのぼつた追ひ剃き一條……」

「むん、あれか、あれア狸だ。」

「へ!?」

「なまんだ……」

ぶツとナタ豆喜世留の吸殻を火鉢の中へ飛ばして、そのまゝ顔を伏せて、火皿を火箸で刎りながら

「狸さ。」

「な、なにがさ？」

「一件だ。」

「串談……!」

「むんにや、證據がある。」

「證據……!」

「うむ。しよ、證據だ、も、もつとも、な、なまん、だ、だ、だぶ、おいら、し、知らねえ、その、い、一件だ、だぶつツ……」

「……?」

「しかし、何も、萩を植ゑたからつて、追ひ剃が、出ねえンぢやね、ね、ねえや……」

「ふう……こいつア初耳だ。近年はちつとも出ねえと聽いてゐたが

……?」

「なに、出ないことがあるものか。おいら、三度も四度も、出會してらアな。」

「ふう……お前、三度も、四度も、出會した?そして、ど、どうした?」

「なに、どうもしねえや。き、斬られたア……」

「え!?」

「毎晩、四ツ半ごろに、おいら、ひとまわり、この寺の堀外を見まわるんだ。ときどき雪駄の音が、ちやりツとすらア。その音が耳へ入るのと、抜き刀が脊中へさつと來るのと、片手がおいらの懷中を探るのと、みんなそれがいつときだ」

「はアてな？」

「まだある——ちらりと眼ばかり頭巾が見えらア。見えたと思ふとばつと離れて、もう其の邊にアゐねえ。」

「ふう……う、う、直助さん。」

「なんだ？」

「お前さん、たしか脊中を斬られた筈だが——?」

「へん、何遍斬られたつて、血も出ねえや。」

「へへーん？」

「おほかた僞儼のおかけだらうよ。」

「ふふーん、それで懷中は？」

「北風だア、いつも……」

「ふむ、それアいゝが、斬られて血も出ねえとは……？」

「そこが、狸よ。」

「どこがさ？ いえさ、どつちが狸なンだよ直助さん？」

「その追ひ剣がよ。」

「な、なアる……」

「そこで、なまんだ……おいら、以前のことは、こん、金輪際、し、

知らねえが、た、狸の仕業にちがひねえ……だぶ、だぶ、なまん……」

「しかしね、」

と若い者が考へながら

云ひました——

「おいらの聞いた話ぢ

ア、どうも狸とも思はれ

ん。と云ふのが、ほら、

あの、五年まへの一件だ

——お武家のお内儀が乳

呑兒を抱いて、仲間を一

人供に連れてこゝを通り

かゝつた。闇がりからの

つと出た雲つくばかりの

大男が、仲間の提灯を叩



きおとすなり、飛びかゝつてお内儀の手から赤ん坊をふん奪つた。仲間めは一散に逃げ失せる。お内儀は武家女房だが、子供に牽かれて、平生の覺悟もたしなみも、何の役にも立ちアしないや。しんしんたる闇夜だ、抑へた賊の掌を洩れる微な子の泣き聲を追ひながら、憎い賊の云ふまゝに、帯も解き捨てた、着物も脱いだ、懷中も投げだした——半刻ばかりして仲間の注進におつとり刀で証けつけたお武家の旦那の眼に、浅間しい妻子の姿が寫つた。お内儀はすでに呼吸の絶えた乳呑兒を、しつかと胸に抱いて、この寺の土塀に凭れて舌を嚙んで死んでゐた。喃直助さん、これが狸にしちア、仕事に念

が入り過ぎる。さうは思ひなさ

らねえか？」

「なまんだ、なまんだ、なむあ

み……どうでも、狸ぢや、ち、

畜生の仕業ぢや。」

「それにしても、そのお武家が、

葬式萬端済まされてから、仇討

に發足なすつたと云ふがの、も

しも敵が狸なりア、いや、この

仇討、とんだ月夜の鳴物入りの、

てんやわんやで埒があかぬわ

え。もつともあの仲間が供につ

いては出たが、うろたへ
眼だけに大男と見知つた
と云ふ、心細い證人ぢや、
はて、天下に大男は星の
數ほどある。喃直助さん、
はやい話がおぬしにして
もちや、その脊中の病さ
えなければ、立派に敵で
通らうも知れん、はは、
はは、

4

その年の萩の花が散つて

時雨の空のうす暗くなりゆくころ——直助がふとした風邪心地から
どうやら熱病を患つて、門番小屋に閉ぢこもつてしまひました。

直助は檀家の衆とはほんの年餘の馴染みしかなかつたのですが、
その姿が境内に見えなくなると、人々は、いまさらのやうに、彼の
人物の印象の餘韻の深さにおどろきました——なんだか厭な顔をし
て、ぶつきら棒に、尻切とんぼの念佛を吐きちらしたり、途方もな
いことを喋べつたり、狸をやたらに持ちだしたり、むうツとして人
の氣嫌をとるなど、云うことが、これんばかりも無い——それでゐ



れて來ました。

「お醫者はどう云ふのかね、直助さん。」

「醫者に、わかるけーた、たぬきの病ひが……なアむー」

ほら出た、と懐かしさうに耳を澄まして

「直助さん、お前、横に臥せつてはゐないのかえ？」

「むうん、おいら、ちアんと坐つてゐる……坐つて拜んでら、なむ、

だ、騙された氣で……」

「誰にさ、誰がお前さんを騙すんだ、直助さん？」

て、人々は彼のあの佻傥姿が見
えないと、何だか物足りなく、
寂しく、つまらなくて、仕様が
なかつたのです。

「直助さん、どうだね、ちつた
アいゝか？」

と門番小屋の板戸を叩いて
は、みんなが聲をかけてゆく。

「わるいよ、なまんだツ……わ
るい、なまん……」

いかにも大病人らしい惡熱に
噓せるやうな、言葉とも溜息と
も知れぬ聲が、小屋の中から洩

「なまんだツ！し、知れたこと、あの和尚の狸だア……」
人々は悲しげに笑ひながら、その時雨のこぼれる朽ちた雨戸を離れて歸つてゆきました。

x

ある夜、ほとほと、直助の小屋の戸を叩いて、和尚が訊ねて來ました。和尚は持つて來たぶら提灯を、骨と皮に覆れて端座合掌してゐる大きな直助のまへに置いて、その裸蠟燭のあかりを中に、ちつと向ひあつて坐りました。

「和尚さん、いよいよ、あばよだ。」

「うむ、迷ふまいぞ。」

「和尚さん、おいら、必死だ、この膝を崩すまい、この拜んだ手を解くまい、と、ち、畜生！和尚の畜生に、だ、騙された氣で、い、一番、騙、される氣で、この、この、このとほりだ、なまいだッ、なまいだア、お、和尚さん……」

「うむ、うむ」

「苦しい！く、苦しいやい！……和尚さん、もういけねえ、が、我慢がならねえ、重い、ば、磐石のやうに重い、せ、脊中だ脊中だ、おいらの……頼む、和尚さん、とつて呉れ！」

「う、な、なにを取れと云うのぢや？」

「判らねえか、せ、傀儡の凝まりだ、これだ……」

直助は胸やそこらを掻き撈るやうにして、もろ肌をぬぎました。

直助の脊中の秘密が、そこに、ゆらゆらと揺めく裸蠟燭の光に照し出されました。彼はあたかも腹掛けを逆にしたやうな、い、い、い、盲縞の手織木綿で工夫して、一個の重い物體を脊中にしつかりと背負つてゐたのです。縫ひ目を裂いてとり出すと、それは小さな石の地藏さまでありました。

「たつた三貫匁しかねえんだ、和尚さん、それが、千貫ほどの重味を持つて、ぐんぐんぐん、壓しかゝつて來るんだ……この五年間、おいら、こ、これを、離したことがねえ、重たかつた、く、苦しかつた、和尚さん……」

云ひ終つて、大きな呼吸の音をひびかせました、死の迫つた苦痛よりは、重荷をおろした安らかさが、その息の調子にひびいてゐました。

やがて、ふたゝび端座して、直助は、しつかりと合掌しました。

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ……」

念佛の聲が、激みなく、澄みわたつて、彼の口を洩れて來ました。

和尚も靜に合掌して、その念佛に唱和しました。

直助はその夜の引きあけに、大往生を遂げましたが、それと共に、「奇蹟」の噂が、遠近に擴がりました——あの傀儡の直助が、念佛の力によつて、五體の揃ふた體となつて、往生の本懷を遂げたと云うのです……

逸高僧傳



女性の本分

行誼上人が神奈川地方を教化
巡行中のこと、宿となつた横濱
の名家高島嘉右工門の家では主人
夫婦が頗る歡待し、上人の旅情
を慰めやうと一人の婦人を招い
て接待に當らしめた。その婦人は
繪畫に巧みなことで知られてゐ
たので師の前で繪を畫いたり茶を
點じたり、又は師の詩に和して返
し歌を作つたりした。
師はその才學技藝を歎稱して、
左右の侍僧達を顧みて
『女の身でさえ此の才藝達者、お
前達は愧づるところはないか』
一座はこれを聞いて肅然とし

たが、婦人のみは得々としてゐた。
だが、師は續けて

『然しなあ女性に柔順でないとい
かん。若し女が僅かばかりの才
能を鼻にかけて、淑かさを失ふ様
などでは
わしはど
うも賞め
るわけに
は行かぬ
で、』
と誰かの
作つた歌
だと稱し
て一首を
認めて婦
人に讀ま
せた。

歌をよむ女房などは持たぬもの
亭主をしりにしきしまの道
婦人は大いに淺慮を取じて、以
後は師の徳に服して教を乞ふに



即座の七絶

至つた。この婦人は當時相當に名
の知れた人であつたと云ふ。

大我上人は塵外
に超然た
る風格を
以つて風
くから知
られてゐ
たが、更
にその麗
逸な詩と
歌は簡易
にしてよ
く悟道を

旗亭に案内した。

その席上、俳人達は難題を以て

上人を困らせてやらうと相談して

『一から十迄の順序で七絶の賦

を作つて二里風煙山水と、四隣

遊治廳客を歌つて戴きたい。』

と申し出た。閉口するかと思ひの

外、上人は料紙を取り寄せると直

ぐにすらくと書いて差出した。

一望二階三里清 四隣五欲六塵營

七賢八達九天樂 十錢解得歌舞聲

ついで

一二三四五六七八九十

と認め、更に

小股取投げんとしてやつと云へば

こける角力のはてらちもない

と云ひ終るや、一座を見廻してに

つこりした。その才智には流石の

俳人達も呆然自失、人を取しめん

とし反つて取をかいいたといふ。

大我——大石良雄を以て云ふも明か

ならず問津談その他多量の著作あつて問

社天竺と號す。天明二年卒す。白蓮

ど・う・や・じ・の・も・ど・こ



岸の柳がそよ風にゆれてゐました。小さい川には、目高がすいすいと泳いで、日の光がいつばいに、野原を照してゐるのです。

『もう三さくだぞ。』

一郎は馬の口をとつて、ひきまはしな

おちいさんはさういひました。

『あゝ、さうだよ。』

と思ふと、一郎はうれしくなつてゐたのでした。

——今日こそ、小さい二郎に目高をしやくつて行つてやらう。いつも約束してゐるのに、おそくなつてしまつたから。

おちいさんはあと鍬を、ひよいとうつ

して、またうなひにかゝるのです。植

付けもすぐで、隣の田では、母さんや姉

さんが、土ならしをしてゐるのです。

——これで田耕ひもをはりだ！

おちいさんが腰をのばしていひまし

話童

小さい弟と

目高の話

福田正夫
野田信畫

『一郎……隣家でな、青が病んでゐるんで、黒をかしてくれろといつてたでな。ひいて行つてやれよ。』

『あい、いゝよ。』

一郎が素直に馬をひいて、行きかゝると、その母がまたあとからいひました。

『父さんがなくて世話になつとるのに、青が病気で田がへしがおくれてゐるやうだから、馬をひいて上げろよ。』

『そ、さうかい。』

一郎はうなづいて、歩いて行きました

——目高しくひがまただめ！
と思ふと、さびしくなつてゐました。

二

隣家の馬ひきの手つだひは、それから毎日つきましました。家へ歸ると、小さい

二郎がまた、毎日のやうに、

『目高まだかい。』

と、せがむのでした。

二郎は生まれてから、足がわるくて、やつと家の中が歩けるばかりでした。町のお醫者さまに診せても、

『東京へ行つて、手術をしなければいけ

まい。』

さういはれてしまつてゐるのでした。

『自分で、目高位すくへるやうに、なる

といゝがな。』

一郎はさういつたこともありました。

そして毎日せがまれるうちに、またそれを考へるやうになつてゐました。

隣家の田耕ひもその日ですむといふ日

でした。一郎がうなだれてゐると、隣の

おちさんがたづねました。

『なにを考へてゐるんだい、一郎？』

『二郎のことだよ。』

一郎はにつこりするといひました。

『あれが、足がなほつて、自分で目高位

すくへるやうになつたら、みんなうれし

いだらうつて、考へてゐたんだよ。』

『ほう、さうかい。』



おちさんはしばらく黙つて、はたらきると、降り出した長雨に、川はすつかり『妻が東京の娘のところに行つてくるつゞけてゐましたがそのうちに、にこつて、目高の影も見えなくなつてゐで、二郎を連れさせてくれる。』
『いゝことがあるか知れねえぞ。』
たのでした。

と、にこにこしました。

『いゝことつて?』

『まあいゝ、まあいゝ、すぐやつてみるよ、なあ。』

おちさんは謎のやうなことをいつてゐたのでした。

三

植付もいつか無

事にすみしました。

隣家でも、遅れず

にすまして、おち

さんは大よろこび

でした。が、一郎

はがつかりしてゐました。折角二郎のた

めに、目高をすくつてやらうと行つてみると、



と、いふのでした。

『どうして?』

母が驚いてゐ

ると、

『あんたも一し

よに行くさ。一

郎と黒がはたら

いてくれたで、

その恩がへしを

するつもりだ。』

『まあ、なんだ

らう?』

『いゝよ、いゝ

よ、行けばわか

るさ。』

おちいさんは

無理おしつけに

して、

『明日の朝だよ、はゝゝゝ。』

と、笑つてゐるばかりでした。

一郎はなんだか少しわかつたやうな氣がして、翌日母と二郎が出て行く時、そつといひました。

『きつといふことだよ、きつとね。』

その母さんと二郎は、それつきり一月も歸つてこなかつたのでした。隣家からは、そのことづてがあつて、おちさんが

くると、

『心配しないがいゝさ。』

と、笑つてゐるのでした、

『仕方がねえ。』

おちいさんもさういつてゐました。

が、ある日、おちいさんと姉さんと、

學校から歸つた一郎が、田に出て草とり

『さつき歸つたよ。』

母がさういひました。

が、そのあとに小さい策を持った男の子……それがゐて、

『二郎もこの通りなほつたよ。』

と、いふのでした。

『えッ、ほ、ほんとかい。うゝ、二郎、歩いてみな、なるほど、なるほど、はゝゝゝゝゝ！』

おちいさんは涙を浮かべてゐました。

隣家の娘の奉公先が、赤十字病院でい

役をしてゐる軍醫さんで、なにもかも

がてふり向いて、

たゞでなほしてくれたといふのでした。

それが、隣のおちいさんの手紙で、一郎の

心持に感心したからで、その話をきいた

院長さんの奥さんが、一郎の姉を、

『奉公するなら家へおよこし！』

とも、いつてくれたといふのでした。

『よかつた、よかつた！』

おちいさんは泣いてゐましたが、一郎

もうれなくなつて涙ぐむと、

『二郎、さあ目高たんととれよ。』

と明るい川ををしへてやつたのでした

『うん！』

二郎はよろこんで、川岸へ行くと、や

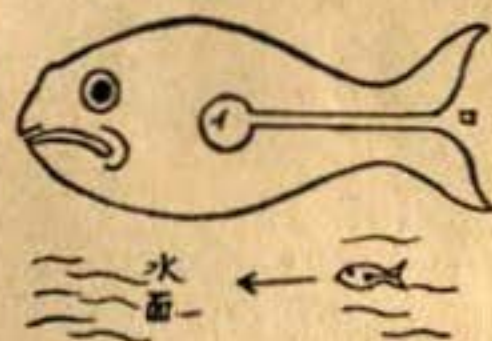
がてふり向いて、



『兄ちゃん、兄ちゃん、目高うれしさうだよ。とらないで、見にくる方がいゝだろ、おれ、もういつでもこられるものと、いふのでした。』
『さうだ、さうだとも……。』
一郎はつよくうなづいて、またはたらしはじめました。(をはり)

紙の魚を泳がせる

先ず少し厚目の西洋紙で魚の型を圖の様に切り抜く目や口やそらは魚らしく書いて下さい。それが出来上つたら、水を満した水盤(なるたけ細長い方がよろしい)の上にそつと置くのですがその際、魚形の表面が水にぬれないやうに氣を付ける



こと。そこで今度はその魚を泳がせるのです。圖のイの處に油を一二滴落すのです。すると魚は前へ前へと泳いで行きます。理由は極く簡単です。注がれた油が圖のイから口に通ずる細い道(すき)を傳つて外に出ます。魚はその反動で進むのです。



ダンホラデイ
ヨナトクハ
トラトクハ
ホカマシ



マクノオイケサラチ
サドキヨナマジカ

ヒキツシヤウナ
コンドハツナ



マリチカデ
ヘタヤンハ

ナサンナ、一、二、三
オドロキ



ボクダノ
カクダシ
力クダシ
馬内クダ
トヒネリ
サハヒラ



クドレレヤ
ロハハ
イオコ

エイ

トリン
ガナ



ダハナダス
オジ馬、
メカコイ
テハンカ



マツ、ヂツト
コンナ
モノデス

ツギハイヨイ
ガンチヤン
オリンビツク
ユキノオ



ドコカラ
ナ馬チカラ
ガデルノ
コウマケ
ケテハキ
ガワルイ

ナニタイ
シタコト
アセモイ
ナイヤ



琉球に法幢をたてた……
袋中上人は、天文二十一年、磐城國岩城郡で誕生された。姓は佐藤といつて、父君は武士であつたらしいが、篤信者で道祐と號した。母君も非常な歸依者であつた。上人の兄は早く出家して諸國周行と稱し、一所不住、隱逸の風、韻高き上人であつた。即ち

琉球に法幢をたてた……

袋中上人

大正大學教授

筑 土 鈴 寛

はじめに

以八上人である。袋中上人を考へるうへに、以八上人の性格をさしおくことはできない。

良定、袋中上人は、天文二十一年、磐城國岩城郡で誕生された。姓は佐藤といつて、父君は武士であつたらしいが、篤信者で道祐と號した。母君も非常な歸依者であつた。上人の兄は早く出家して諸國周行と稱し、一所不住、隱逸の風、韻高き上人であつた。即ち

叔父僧、能滿寺良要について出家したのは十四歳、永祿八年のことである。以後大澤山圓通寺、綠山、足利學校等に内外の學を習修し、天正八年、廿九歳、故郷楡葉の成徳寺を住持した。以來淨宗宣揚に力をいたし、著述に務めて、夙く數部の著作をものした。慶長八年五十二歳、夙に入明の志を抱いてゐたので、便船を得て渡航したが、朝鮮征伐後幾程もない當時のこととて、魯宋にまで至つたが、事情許さず、船を回して琉球に入つた。當時琉球佛教は、明のそれの縮圖とみてよいほどに弘通してゐたので、こゝで上人はやゝ充ち足りた氣持がせられたことであらう。かくして滞琉三年、桂林寺を創建し、琉人のため琉球神道記三卷、琉球往來二卷を著した。琉球

の書物には、那覇人之を習誦すと記してある。國王尙寧の篤く上人を瞻依されたことは、國王自らの上人圖贊によつて推察することが出来る。かくて慶長十一年歸朝、以後京師、南都、山城等に往住、到る所景仰欽慕の信者を集はしめ、寺庵自らにして成るもの多かつた。その間、學につとめて日夜倦まず、生涯の著述總じて五十部以上に及んでゐる。かくして寛永十六年正月廿一日、山城綴喜郡飯岡西方寺に、世壽八十八を以て入寂された。

悩む

上人は青年時代、思想的な悩みから一再ならず死を決心された。

よほど深刻な辛い問題であつたとみえて、後々も、このことに就いてものに書記したりした。蘇つては夢にふとさしのぞき、冷汗を覺えるやうなこともあつた。ではどんな悩みであつたかといふと、誰れも青年時代ありがちなことであるが、理性のみによつて、この世を計らんとしたらしいのであつた。疑團の生じないうちは、之でも済まされた。——身冷カニ心穩ナリ——と上人はこの態度をよしと是認し、かつは自ら慢ずるやうな氣上つた氣持も萌さないではなかつた。上人は獨り覺め、獨り牙え、獨り徹り、獨り理めて、氷劔のやうに冷やかに澄むことができた。然し上人も後に氣づかれたことであるが、それは蒼白で脆かつた。

あらゆるものゝ價值は否定された。佛さへもさうであつた。況や

泥木圖像は、青年の上人には何ものも意味しなかつた。物質にすぎぬと思はれた。たゞ一つ信じ得るのは、己れの理性であつた。従つて經説なども信じ切れないといふやうな御氣持もあつたらしい。我法の魔の影が、知らぬうちに寄添うた。自分だけが尊い。更にはこの世だけが尊い。六根はこれ淨土、現世はこれ淨國、生半可な悟りめいた氣持もお持ちであつたらしい。それは執拗な我であつた。上人はしかしかうした氣持も否定しつゞけてこられた。がもともと出發が間違つてゐたため、否定が否定だけに了つてしまつたらしい。上人はそれに氣つかず否の一事を以てよしとせられたらしい。結局之も我法深きがなせる仕業であつた。——予先ニ他ノ示ヲ受テ燒灰埋土ヲ決定シテ、身冷ク心穩ナリ——かう後の書物に記してゐられる。何かこの言葉には冷然としたものを感じさせる。——上人をいさゝか引下してしまふやうであるが、芥川龍之介の死と彼の思想とを考へ合せると通じがはい。——「心穩ナリ」と上人も云つてゐられるやうに、それが満足の境涯であつたものと見える。所謂佛教の二乗である。

智によつて得んとした、又得た究極と思はれるものは、手を延べれば延べるに従つて遠いものになつてしまふ。疑團が崩し、心の流轉がはじまる。この間約二十年の悩み、非常に永い悩みであつた。そしてこのことは、嚴かな、眞面目な上人の性格を知るたよりともなることがらである。——一タビ身亡シテ、何ゾ心ノ流轉アラシヤ。

爾シテ自心ヲ起テ公案スルコト二十年ニ向トス。明師ヲ尋ニモ縁ナシ。疾死テ自知センニハ如ジト思ヘリ——晩年一信者に書かれた書物にかういつてゐられる。傳記にはさうした消息は記してない。上人のいろ／＼の著述、及び書簡等から、その惱みはかうもあつたらうと推測するのである。三十九歳(または四十歳)往生要集の空觀の文を讀んで、闕然と眼を開かれた。傳記にさう記してある。上人の眼にどんな明るい光が映じたか、如上の惱みと、要集の文とを考へあはせるとは推測できるのであるが、要するに、地獄の恐怖を身を以て感じ得たこと、罪惡に對して深い虔みの念の生じたことであつた。

上人は自分を離れることができた。自分の小さいことを知り得た。そこから大きなものの御心を、そのまゝに信ずる氣持が萌してきた。同時に他を顧みる餘裕がでてきた。即ち慈悲、社會意識。上人をかうした境地に導いたのが往生要集の空觀である。結局は要集によつて青年時代の惱みが正しく肯定されたのであつた。以前の見解は、生命を、まことを、信を缺いてゐたのであつた。こゝから、淨土人としての道が開かれてきた。恐らく念誦の御聲ま



袋中肖像 袋中庵藏

でが、變つて來られたことと思はれる。

上人は青年時代のこの邪見——と上人は云つてゐられる——を、後にいたるまで、非常に神聖に警戒されてゐる。その神聖がこよなく尊い。非常に潔い美しいものと思ふ。心の汚れは關々までも清まらずにはおかぬ上人であつた。邪見は夢にちらと現れたにすぎなかつた。夢を現實の現れと信じた昔の人であるから、たとへ夢にしても、軽く片づけてはしまはなかつたことにもよるけれど、それ

に對して嚴しい反省をされてゐる。ごく晩年のことである。自身に對して嚴しい上人、よいかげんではすましておかぬ上人、次の文章を讀んで戴いた方が早判りする。

頃ヒ寛永十年四月八日

ノ夜 夢ニ其所他國ナリ 傍ノ道ヲ行ニ知己ノ長老一伴シテ路行ス 其人我ニ問 何ノ所ニ行玉フヤ 講談ノ爲ニモ有ラン 我其ヲ不レ答語テ云 某ハ自國ニテモ他國ニテモ請用信賴ノミ即チ其人黒牛ト成ヌ 驚テ覺ヌ 後ニ思ニ如斯ノ事ハ臨終狂亂ノ基ヒナリ 其時ハ識神ニ主ナキ故ニ 一世ノ事善ヲモ惡ヲモ恐ナク白狀ス 起テ牛馬ノマネセントスレハ着病ノ人オシ伏ヌ

はれる。

もう一つの話。前の話と同じ時である。三月廿四日外出の旅から草庵に戻られて、自ら草鞋の緒を解かれた。折から降る雨を臆切にされて、手水をせず、濡れた木の葉で手を拭はれた。さて本尊に向ひ、御顔をうち仰ぐに、さながら、朽木のやうに荒涼く拜された。はつと思はず外に出で、降る雨に濡ちつゝ手を清ませ、再び御佛を拜された。この度の御顔は、輝いて尊く拜まれた。これも行が心を誘つたのである。

銀の蓮

故郷にあられた時のこと、夢に西方を仰いで命終された。——梅ノキリカブニ銀ノ蓮花一莖開タリト——かう上人は自ら記してゐられる。なんと匂はしい品高き夢であらう。も一つ花の話であるが、晩年七十九歳、日中の禮誦をつとめてをられた時、佛前瓶花に彌陀の御姿をまざまざと拜された。これも美しい話であると共に、眞實のことであつたと思ふ。私は山城の西方寺で、この瓶花見佛の圖をなつかしく拜してきた。近代の人達は、かうした類の話を、頭から否定してかゝる。まことのうすらいできた證據でもあり、眞剣さを缺いた態度でもある。一色一香無非中道は、佛教の常套語であるが、宗教的にそれは眞であり、藝術的にも亦眞實である。新しい例でも出さぬと、御承認ない方もあらう。詩人北原白秋は、かう云ふ態度

の人で、一寸類のない尊い詩人である。ある意味の聖者である。不思議にも、上人の傳記を研究してゐると、摩訶不思議が、何れも眞實のものとして信じられてくる。

このやうな潔さ、美しさを感じる上人に、なほ幅のある、厚みと廣さを感じさせるものは、現實處斷の鮮かなことである。葛藤を裁斷することの活潑なこと、機辨妙用のいみじさである。その點無礙なるものがあつた。恐らく上人が、深く學ばれた禪の影響にもよることであらう。

轉識得智

上人のお弟子に、聽雪といふ愚かものがゐた。上人御臨終の前日、辭世を記しとゞめようとされて、枕頭に用紙を延べさせ、聽雪に筆受させた。元來非常な惡筆であるうへに、上人御臨終間際のこととて、取亂してもゐたのであらう。上人の口をもれる「轉識」の言葉を、おづ／＼見苦しく書きつけた。見かねた上人は、やにはに手を延べて、自らそれに記された。今に残る辭世を拜見すると、聽雪の筆着けとは反對に、兩筆向ひ合ひに一紙に記されてゐる。そして聽雪の書いた二字が、墨黒に、味なく拙に残つてゐる。御臨終間際まで、それほどに氣の張り切つた上人でおはした。辭世にいふ「轉識得智トハ初春ノ霞ノ色ヤソレナラン」——何と、丈高くして、ひよりひようと、安らかに、靜かな御辭世であることか。



お念佛に生されて

梅原眞隆

沙汰

唯念佛して救

はれる—専修念

佛—と云ふ事が

法然上人の血の出るように御苦勞下された

要點であります。そして、念佛一つに我々

の完全な生命の救ひを見出だされた。御念

佛を喜ばれた方はそれ以前にも澤山いらせ

られたが、法然上人に至つて、本當にこの

御念佛と云ふものの味ひを見出されたので

あります。

ところが、この専修念佛がやゝもすると

一つの偏見を伴うてまゐります。

「上人は御念佛一つで助かると仰言つたと

云つて、御念佛だけ唱へておれば、法事は

要らぬ、學問も要らぬと云ふ態度の人があ

る。併し、これでは私はどうしても落付け

ない。法然上人が念佛専修と仰言つたのは

他の言葉で云へば、御念佛一つの中に總べ

てが含まれてゐると云ふ意味に於てであつ

て、總らゆるものを排撃する固執ではなか

つた。御念佛は總らゆるものを高次的に統

一してゐる。これが法然上人の御心で、こ

の御心を我々は落付いて考へなくてははいけ

ない。

そこで法然上人の御念佛は、一面から云

へば、助業を傍にするに云つて、拜むこ

とも、觀念すること、讀誦すること、

供養すること、それを傍にして専念す

べしと云ふ處にその有難い御慈悲がある。

總らゆる人生々活を排撃したのではなく、

念佛の中に全き人生がそのまゝ念佛で統一

されるやうに磨き出された處に、この専修

念佛がある。法然上人の御法語に

『衣食住の三つは念佛の助業なり』

とあるが、衣食住の中にそのまゝ専修念佛を仰言つたのは、頑固な偏見ではなく、凡夫の生れつきのまゝ、さながらの人生を靜かに手を合して念佛する處に統制ある價值があるのである。善人は善人ながら念佛し悪人は悪人ながら念佛する。人生を特別な形に規定して、念佛を固定したのではなくて生れつきのまゝ念佛するように高次のに統一したのが専修念佛であります。衣食住と限らずとも、人生生活の諸行は悉く念佛であります。

この法然上人の御精神を忘れると、念佛は滅びてしまひます。

さてこの御念佛は法然上人によると往生極樂の途であります。往生の途であると云ふ事は、死んでから先の事のやうであります。すが、そりではなく、滅び行く人生の中に滅びざる人生を握むといふ事である。云ひかへれば永遠の生命を握むと云ふ事であり

ます。この意味を法然上人は、
『現世の過ぐべき途は念佛の申されんやうに過ぐべし』

と説いてゐられる。往生念佛をはつきり握まれてゐる、非常に有難い御言葉であります。現世—現實の人生、五十年の娑婆の日暮し、この生活を私達は如何にして立てるべきであるか、これは古往近來の絶大な謎であります。法然上人は「念佛の申されんやうに過ぐべし」と、念佛によつてこの謎を解かれた。だから

『念佛の妨げになりぬべくば、何なりともよろづを厭ひ捨て、これを止むべし』

と云はれてゐる。念佛を唱へるに邪魔になるものは、どんな立派な地位であらうが高い生活であらうが、絶體にいけない。眞の人生を見失ふてはならぬ。どんな名譽の仕事でも眞の人生を忘れてはならぬ。御念佛こそ、この眞人生を握むものである。だから法然上人は念佛の申されんやうに人

生を過せ、御念佛が唱へられなければ、どんな人生でも打毀せと、喝破せられて、嚴肅なる反省を要求せられるのであります。

私は昨年、大阪毎日新聞がサンデー毎日に「私の英雄」と云ふ題で選ばれた事がありました。その時に、私は山本進と云ふ名も無い一人の青年を選びました。彼は現在長崎縣の諫早と云ふ處に、小さな草庵を作つて念佛を唱へてゐますが、東京の大學の英文科出身で、非常に苦學、努力の人であります。始は後藤靜香さんの希望社運動の尖端を行つた人でありましたが色々な事情で最後の彼の魂の落付き場所となつたのは、御念佛でありました。彼が魂の故郷を求めてあちこちを漂泊して最後に留つたのは諫早のある寺であつたが、その老師に依つて御念佛を唱へるやうになりました。道徳で人生を生活するものと思つてゐたが、道徳では生活出来ないと思つて來た。教壇に立つて倫理の話をして

自分で自分の樂屋がわかつて、何だか嘘を云つてゐるやうで、御念佛を唱へずにはゐられなかつた。始めて自分の魂の故郷を見出したのです。當時、諫早中學の英語の先生でしたが、洋服のポケットには必ず珠數を入れて、何時も御念佛を餘念なく唱へた。念佛は物の價值意識です。御念佛をしてゐる間に物の價值が解つて來ます。閉ざれてゐた智慧の眼が開かれるのです。彼もこの眼が開かれると、一碗の御飯も、手を合して頂かなければならぬ氣持が起つて來た。今迄は事務的に辨當を開いてゐた先生が、奥さんの作つてくれた冷たい御飯を手を合さなければ食べられなくなつた。

山本君がかう云ふ氣持になつて來ると、恐ろしいものです、山本君の受持ちの級の生徒達が皆何時の間にやら手を合せて御飯を食べるやうになつた。また、生徒のポケットにも山本君と同じやうに珠數が忍びこんでゐる。所が當時はまだ學校では宗教々

育教禁の時であつたから、この現象も學校で注意するやうになつた。また、一面には大學出て間もない青年でありながら生徒から非常に尊ばれた事が、思想上の違つた立場の先生達の妬みとなつて、遂に職員會議の席上で問題となつた。

「山本君のやる事はどうも不可ぬ」

「どこがいかにぬのですか」

「君は文部省の訓令を知つてゐるだらうが宗教と云ふもので子供を育てゝはいかにぬじやないか。況んや宗教の形式を以て子供を育てゝはいかにぬ。君の處の生徒はまるで淨土宗の信者みたいだ。かう云ふことは斷然いけない。」

この非難、當時の教育方法から云へば、一應尤な事です。ところが山本君は

「私は御飯を食べる前に手を合せなさいとは云ひません。珠數を持ちなさいとも教へません。知らず識らずのうちにさうなつたのです。これは決して偽りではありません

だが私は責任を逃れようとは思ひません。したのではないが、それが結局悪い事ならば、私が悪いのです。私が手を合せて食べた事が、澤山の者を悪くしたと云ふのならそれは私の責任です。けれども、一寸御尋ねしますが、自分で耕しもせずに、坐りながら食べられるのは天の恵みがあるからでせう。これでも私の拜んで食べるのは悪い事でせうか」

と烈々の信念で教員達へ反問した。

「若しも私が拜んで食べられないならば、私はもう教育は出來ない。私の生きる途としてやつてゐる事が間違ひであるならば私は斷然辭職します」

と云つてその場へ辭表を出した。

「イヤ、君はまだ年をこつて居らぬから、そんな事を云ふが、若し辭めてしまつたら明日からどうするかね」

と校長が聞くのを

「御親切は有難いが、私は辭めさして貰ひ

たい。明日からの事等は考へて居りません」
「君は、そんなに逆上せ上つてどうするんだ」

校長の戒めも聞かずに、山本君は遂に止めてしまった。併し、山本君は一錢の貯へがあるわけではなく、如何にして食ふか、早速に問題となつた。奥さんと相談して、血の出るような思ひをして八百屋になつて諫早の町を歩き始めたのは、それから間もなくの事であつた。心ある町の人は

「我々の子供の精神を託した先生であつたのに」

と嘆く者もあつたが、山本君の火の様な信念は次第々々に道を開いて行き、何時の間にもやら小さな草庵も建ち、靜かに御念佛の出来るやうになつた。

私がこの山本君を「私の英雄」として選んだのは、法然上人の

「念佛の妨げになりぬべくば、何なりともよろづを厭ひ捨て、是を止むべし」

の御言葉を如實に生かしてゐるからであります。先生になつて御念佛が唱へられなければ、八百屋になつて念佛を唱へる。八百屋になつて念佛を唱へられなければ乞食になつて唱へる。御念佛は我々の生活の指標であり、迷を開き悟を開くものである。

「若し聖で申されずば、妻を儲けて申すべし。妻を儲けて申されずば、聖で申すべし。住所にて申されずば、流行して申すべし。流行して申されずば、家に居て申すべし。自力の衣食にて申されずば、他人に助られて申すべし、他人に助けられて申されずば、自力の衣食にて申すべし。一人して申されずば、同朋と共に申すべし。共行して申されずば、一人籠居して申すべし。」

法然上人の御信念は實にはつきりしてゐます。ともかく我々の生活の全部が御念佛を唱へられるやうに役立たなければならぬ。そこにほんとの人生の價值があるので

す、御念佛を喜んで、一足々々西方の御淨土に向つて行く。これが我々の本當に救はれる道であります。

とにかく、法然上人は御念佛一つを人生統一の指導原理として受敬せられ、どんな立場や生活をしてゐても、御念佛を唱へて救はれるやうに人生を組立てよと御親切にお諭しになつたのです。このお諭しは如何に時世が變らうとも、永遠に我々人類に不滅の意義を與へるものであります。

踏んだり蹴つたり

劇作家が彼の新作の初上演を見物に出かけた。ところが、上演の結果はあまり香ばしくなかつた。

最終の幕が降りると、この不幸な劇作家の背後に席つてゐた一婦人が、彼の肩をたいて、何にか手渡しながら云つた。「貴方がお出になつた時直ぐ貴方が作者だと云ふことに氣が付いたので御庭いませすの。それで記念にもと思つてお髪を一把切り取つて戴いておきましたの。……でもこれ御返ししますわ。」

信 仰 相 談

擔 當 中 村 辨 康

念佛は謗法か

(問) 私は去年父に死別したのが縁となり全政寺様の御み

ちびきで念佛申してをりま

す。私の實兄が元佛立講だつ

たので(今は轉向して念佛申

して居ります)講の本があり

ましたので、つれづれのまゝ

に取出して讀んで見ました

ら、念佛者は無間地獄へおち

ると説かれてありました。そ

れは謗法だとのことです。私

等は法然上人のお言葉を信

じて居りますが、考へて見れ

ば、地獄一定の想が致します

ものゝ、誠に心外でなりま

せぬ。なぜ日蓮上人はあんな

に言はれたのでせう。上人も

前に淨土門の方だつたと
の事、何か根拠が有るのでせ
うか。私等にわかるやうにお
教へ下さい。

(廣島 春草)

(答) 四個格言と云ふものが何

う云ふ御意志から出て居ります

か、そして何う云ふ根拠がある

のか存じませんが、佛教である

限り廣い意味での念佛のない宗

派はありません。皆な佛を目指

す者であり、佛を念じない者は

ないからであります。南無觀世

音菩薩と云ふ法華經の「念佛

觀音力」も南無妙法蓮華經と

云ふ唱題も均しく廣義の念佛

であります。即ち佛教徒は皆な

成佛を理想として居り、その理

想を念願しない者は一人もあ

りません。隨て歸依佛南無佛の
念佛は佛教入信の第一條件であ
ります。然し我國に於ては一般
に念佛と云へば南無阿彌陀佛の
ことだと信じられて居り、法然
上人歿後、反法然思想が強く起
つて、生前各宗の學者から非常
に尊敬せられ愛護せられて居た
反動とでも申しませうか「法然
こそは宗教革命を行つた者であ
る。我等の法敵であつたのに氣
が付かなかつたのは誠に迂闊
千萬にあつた」との後悔が、遂
に強烈な法然排撃思想と化し、
第二祖となつた鎮西上人でさ
へ普尊宗沙門と云はねばならぬ
程の重壓を受けられたのでし
た。隨て各宗はこぞつて念佛を

したなどと云ふ話も傳つて居
ります。こんな次第で反法然思
想の盛んであつた時代に開宗し
た日蓮上人が既成の佛教各派
に對して、論陣を張らうとされ
た事も私共も自分を其立場に
置かせれば充分に同感の出来る
事で、分けても立正安國論など
拜見しますと、日蓮上人の相手
は唯だ法然上人一人だつたこと
がハッキリ判ります。日蓮上人
の開目抄には「一天四海皆な法
然の弟子となる」とありますや
うに、反法然思想の重壓の下に
根強く張つて行つた念佛信仰の
底力は寧ろ恐るべき勢であつ
たかも知れません。中里介山氏
は「最もよく法然上人を知つ
たのは日蓮上人である。觀覺
上人日蓮上人は法然上人の
兩脇士の如き地位に立たれて
居る」と云ふ感想を洩らして居
られますが、日本佛教史の上か

信 仰 相 談

ら或はさう見えない事もないと思ひます。また初めにも申しました通り廣義の念佛は佛教の通規であり、佛教徒の理想貫徹の念願から現はれる行爲でもありますから、決して謗法ではない筈ですが、其南無佛の中に阿彌陀と云ふ三字が加へられた南無阿彌陀だけが謗法だとは誠に妙な話であります。御承知のやうに阿彌陀は永遠に（無量壽）明るく（無量光）と云ふ人間の氣持に應同する意味の言葉ですから、南無佛よりも一層人間に取つて適切である譯で、謗法だの罪だのと云ふ意味はありません。唯だ法然上人が立教の立場から佛教を二分して聖道門に對して捨地閑閑と云ふ言葉を使つたと云ふ事を謗法としたやうですが、それは日蓮上人が佛教を二分して爾前教を未眞實とせられた事と同一轍の

立教的態度で、各宗各派の開祖は皆な同じこととあります。また日蓮上人が初め淨土門に弟子入りしたと傳記にある相ですが、史實の上に確かな事か何うかは分りません。傳記と云ふものはカナリ粉飾されて居りますから、史的研究の結果を待つより外はないと存じます。唯だ面白い事は四箇格言の中には天台宗を除外して有り、其天台宗が念佛を捨てゝ居ないと云ふ事があります。すると同じ南無阿彌陀佛でも法然上人のだけが鎗玉にあがつて居る譯で、此邊の消息はよく判りませんけれどもトテモ愉快な人間的意味を感じます。

空念佛と云ふこと

と

（問）四月二十三日大朝紙上の島田農相談中『要は空

念佛に終らしめずに實行することだ。云々とあり、此の他にも昨今新聞や雜誌等に空念佛々々と云ふ言葉が度々記載されてゐるのは實に残念で御座います。

法然上人の御教の中には總ての條件が具備せない稱名が空念佛であると御示になつてゐないと思つて、御念佛には絶対に空はないと堅く信じてをりますが、空念佛があるものでせうか、御教示を。

（愛媛 椿好）

（答）空念佛と云ふものだつてあらうと存じます。信仰があつての念佛でなく、何かシクジツた時に南無阿彌陀佛と口から出た場合、それは丁度「南無三寶」と云ふ言葉が「シマツタ」と云ふ言葉の代用になつて居るのと同じ意味に使用されて居るからです。また乞食などが木賃宿で

衣裳を借りて、俄坊主となり錢貰ひの爲に「寒中修行」と稱して念佛して歩くのも、全然信仰上の行爲ではありませんから「ソラ念佛」「カラ念佛」と云はれても止むを得ませんでせう。法然上人は信仰の上の念佛は三心具足の念佛だと云つて居られます。一口に申しますと淨土に生れたい念願（願心）から何んなものでも念佛申せば救はれると信じて（深心）まごころ（至誠心）から南無阿彌陀佛することを云ふのですが、一度信仰に入つた限りに於ては、一見空念佛に見えるやうでも、これは決して空念佛ではありません。人間ですから何時でもまごころが充實して居る譯には行きません。念佛して居ながら雑念妄念の起つて居ることもありませう。然し例へて申しますれば、私達が何か用事が出来て何處

信 仰 相 談

かへ行く時 何處と云ふ目的に向つて右足と左足を相互に前へ出して歩きますが、左右と一足毎に注意しなくとも、或は常に目的地の事丈を心に思つて居なくとも、急所急所の曲り角で注意しきへすれば、例へ他の色々の雑念が起らうとも目的地に達する事が出来るやうに、念佛の中に雑念が起つて一見本當の念佛のやうに見えなくとも、雑念と氣がつけば、それを直ちに振り捨て、正念に歸ればよい譯で、意識しない一足一足の運びが決して無駄でないと同じやうに、一聲一聲の念佛は決して空でありませんから、御心配の無いやうに願ひます。

らがり起れば「かう云ふ淺はかな者ですから」と一層如來様の御本願に頼み、一層如來大慈悲の難有さに喜んで、念佛の方向を無量壽無量光の御胸の中へと向けて行く可きだと存じます。

歸命と感謝

(問) 淨土宗佛徒として三經及び法然上人法語抄を毎朝佛前に於て讀誦いたしますが、先亡靈前になす十唱の外に意識を明瞭にする回向文を教へて下さい。更に感謝の念佛に對する超覺的立場として歸命の念佛を顯説して下さい。

(京都 大路丈男)

(答) 第一問の回向文には色々御座いますが、何んなのがよろしう御座いませうか、通俗的なものを唯だ一つの例として申し

上げますならば「上來修し奉る何々經并に稱名念佛若干遍其他集むる所の諸々の功を皆悉く回向し奉る。何々靈位、願くは菩提を増進して淨土を莊嚴し給はんことを(或は、離苦得樂して「速かに無生を證し」淨土に超生せんことを 如來大慈悲哀愍護念)」と云ふやうなものか、又は「其佛本願力、聞名欲往生、皆悉到彼國、自知不退轉」と云ふやうな偈文かで、其あとで念佛十唱致します。委しいことは最寄りの御寺院に御尋ねになるのが一番よろしう御座います。

第二問は誠にむづかしい御質問で簡單には申し切れません。それは人間の心は色々に変化致しますで、同じ氣持を持続する事が出来ないからです。然し自分をよくよく反省しますとき、自分の淺間しさが痛感

されますから、感謝よりも先以て如來の大慈悲にすがる歸命の氣持が起るのが順序かと思ひます。歸命が出来て初めて感謝も起る。それが人情の自然です。ですから少し長く念佛して居りますと、無論雑念も交りますが、或は歸命の念となり或は感謝の念となり、或は悔恨の情となり或は讚歎の氣持となりして色々に変化致します。ですが押しなべて云へば歸命の想の方が多い筈です。「南無と歸命」と善導大師も云つて居られます。何處までも謙虚な立場に反省を怠らなかつた法然上人は「愚痴の法然房十惡の法然房」と如來の前には小さな御自分を深く顧みられて歸命せられたのでした。

然し感謝の念佛と歸命の念佛と何ちがよいか悪いかを議論するのは誠につまらぬ話

信 仰 相 談

で、信仰の事實から云へば、歸命が出来から感謝の念も起り、感謝の氣持も起るからそれだけ歸命の心も深くなるものです。ですから之を一方に片付けて仕舞ふのは何うでせうか。

元來一方付ける事の出来ない人間の感情を何時でも何處でも同じ状態にあらねばならぬとすれば無理も出て来るでせう。思想的に毛嫌ひしないで自然に素直に御念佛することの方が本當だと思ひます。

死んでから極樂に生れ得るか？

(問) 如何なる小さな事にも御佛の慈悲を見出し、悦び悦び感謝の日暮しをさせていたゞいてをりますが、死んで後に西方の極樂淨土に生れると言ふ事がどうしても信ぜられませんか。

一體極樂世界は今世の生活の上にあるものか、死んで後の世界にあるものでせうか、何卒適切なお解答願ひ申します。

(名古屋 山田永一)

(答) 既に御佛の慈悲を悦んで居られるならば、それで充分ではありませんか。法然上人は「死生共にわづらひなし」と云つて居られます。御佛に南無することとは、私達の小さな生命を如來様にお預けすることですから、此上に自分で心配せんでもよい筈です。それを兎や角心配するのでは、逆に云ふと、まだ御佛の大慈悲が信ぜられて居ないと云ふ事にもなりませう。佛教では「心身土」と云ふ事を申します。如來様の御心即ち大慈悲、其儘阿彌陀佛のみからだであると共に、阿彌陀様のおからだは其儘阿彌陀様の世界で

もあるですから、既に阿彌陀様の御慈悲が信ぜられて居る限り、極樂淨土は問題にしないでよい事で、それが何んな状態の存在であるかと心配する必要は毫もありません。人間の想像し得ぬ状態を、人間の常識で判り得る言葉で説明しては、間違ひだらけになつて、却て判り難い事にもなるでせう。

また私達の命は單に五十年七十年と云ふ束の間の短いものです。阿彌陀佛は限りなき壽ですから、私達の生死はそれに比較すれば宛かも消えてはむすぶ水の泡の如き短時間に過ぎないものです。して見れば既に死生共に如來様におまかせした限り、生前も死後も問題ではありません。希提華夫人と云ふ方はお釋迦様から阿彌陀様の御話をきいて、直ちに「無生忍」を得たと云ふ事ですが、誰でも

南無阿彌陀佛すれば「死生共にわづらひなき」無生忍、忍とは認めること(が)得られる筈です。ですから阿彌陀様のお慈悲が信ぜられたら、もう外のことは御心配なさらないのがよいと思ひます。尙死後の問題に就ては「淨土」五月號七四頁を御参照下さい。

◆投稿に関する御注意

御注意

御投稿は葉書又は封書でお送り下さい。但し封書でお送りになる時の質問用紙は四百字詰原稿用紙一枚以内にて認めて下さい。たび／＼申すことですが、文字は楷書ではつきりとお書き下さい。誌上の匿名署名は御自由ですが、投稿には必ず本名をお書き下さい。編輯部では秘密を厳守し且つ誌上に發表された讀者の住所氏名は、本人の許可なくしては絶対に教へ致しませぬから、その點を安心の上、どし／＼御利用下さい。



心得ておきたい

按摩のこづ

一日を外で働いて疲れて歸られる御主人に、美味しい晩餐を用意することも、奥さんなり女中さんなりの心掛けなければならぬ大切な仕事ですが、更に進んでその疲勞を醫やすために按摩をしてあげる丈けの氣心をこめて居たらどんなにか喜ばれることでせう。然し按摩をするためには少くとも天の心得だけは是非必要です。

(一) 自分が疲れないこと

マツサージは血液の循環をよくすることが大事なのですが、力ま

かせにたゞいたり、もんだりしてはかへつて不快になり、自分もすぐ疲れて了ひます。丁度時計の振子の様にきまつた調子でやることを忘れてはなりません。

(二) こぶしの作り方

石ころのやうにかためたこぶしは、すぐに疲れますし、お互ひが痛いばかりです。軽く指を曲げて一錢銅貨がする／＼とすべる程度に穴をあける位にすればよろしいのです。

(三) マツサージにとりかゝる

準備

御老人などであれば便所に行かれる様にすゝめること、尙食後少くとも卅分たつてからでないといけません。

(四) 肩のこりをなほすマツサ

ージ

まづ冬であれば寒くない低度に薄着になつてもらひ夏ならば肌襦袢一枚位にしてもらひます。

(イ) 前に述べたやうにこぶし

を作り、僧帽筋即ち肩の上をたゝきます。回数は適當にします。

家庭ノート

ナメクジ退治

これから梅雨時になると「ナメクジ」が不愉快な移行の跡を残して、臺所、廊下、はては座敷の中にまで匍ひ廻つて、誤つて踏み付けでもしやうものなら氣持の悪いぬらぬらが仲々落ちず、随分困らせられるものです。

それで、この無氣味な「ナメクジ」の驅除法ですが、ナメクジは濕氣の多い有機性に富んでゐる土壤を好み殊に落葉、塵埃、臺所の野菜の屑を堆積して置くと、そんなところから繁殖を助長するものですから、先づ第一にそう云ふものを除

(ロ) 次には掌をひろげて肉の一番厚い所で押すやうにしながら下から矢の方向に圓く掌をまわし乍ら何回も繰返します。向つて右は右の掌で左は左の掌でやるのです。

この場合注意することは決して骨を上からごり／＼やらないことです。ゴリゴリやると大變いたいものです。

(ハ) 次には拇指の腹で(ロ)

でやつた方向に押してゆきます。(ニ) 次には拇指以外の四本の指で前と同じに押してゆきます。

(ホ) 指をすつかり延ばして右の手では左の肩を、左の手では右の肩を即ち手の甲が頭側になるやうにし軽くたゝきます。その時手は次の圖のやうにします。

(ヘ) 右の掌の箇所をつかつて同じ場所をもみますが、これも



右の手で左肩、左の手で右肩をも

みます。

(ト) 次には兩方の手をすつかり擴げてボン／＼肩の所をたゝきます。

(チ) それから深くくびすじをつかんで腕の方までやります。

(リ) 逆に兩腕をじつとつかんで引き上げる様に二三回します。

以上で終りますが回数のかいてないのはよく練習して見てから、老

無痛の拔牙

齒を抜く時の痛さは御存知の方が多くと思ふが、最近ケンブリッヂの一學者が注射も催眠薬も用ひずに無痛で齒を抜くことに成功して斯界にセンセーションを起した。つまり、催眠術を用いたのである。

今から一ヶ月前その學者は齒科學生達の面前で一人の患者に催眠術をかけておいてから、その頬に針を突きさしたり、その他色々痛みの目につけて見たところ、その實驗中患者は全く痛みを感じないのである。實際患者の顔はその間一時間ばかり無表情でまるつきり反應を見せなかつた。術者の一聲でやつと正氣に歸つたが痛みなどは少しも残つてゐなかつたそうである。

去することが必要で、又居ると覺しい所には石灰(灰)でもよい)を撒布し、更に石油乳劑を撒いて浸透を容易にします。そしてこれを殺すには少量の毒劑を甘藷、馬鈴薯の切片に塗布したものを置くのが最も良いのですが、毒劑であるから誤つて他のものが食すやうな事があると危険です。一般には、何回も夜間の彼等の活動時に一定の場所に採取して殺した方がよろしい。

その方法は、素焼きの植木鉢等に土砂を盛り、其上に適當な小石四—五個を置きますと、夜着いた蟲は朝は中にかくれて居ますから、之を石油中へ入れるとか、焼くとかして殺します。

人ならばこの位の力で何回位がよいかを人によつて案配すればよいからです。

(五) 御老人な

その全身のマッサージ。

(イ) 頭のマツ

サージ

手拭を頭にかぶ

せて、出来るだけ

手をやはらかに動

かして、五本の指



て寝かせ顔は横に向けて枕をあてて置き、首筋のよこから腰まで、脊骨の両側を靜かに撫でて、張つ

てゐる筋肉をゆるめ、脊骨を何回も押したり撫でたりします。

この時の姿勢は、ねてゐる人の上にのしかゝるやうな氣持で、身體の重みでやるやうにしない、疲れます。

なるべく丁寧に長くマッサージするがよろしい。しかし揉みつかれて翌日いたむやうではマッサージの効果はなくて、かへつて害を伴ふものですから、柔い力で効果を上げるやうに注意します。

(ハ) 最後に足の裏——土ふまずを中心にして指の方、踵の方、更に左右にマッサージします。指は軽くひつばるやうな氣持でやるのです。

(ニ) 足は軽く數回撫で下します。これで身をうつぶせにし

(田中 法善)

玉葱を切るとき

玉葱の皮を剥く時 マツチの軸を一本口にくはへてほんの少し唇をあけるやうにしてやると決して涙が出ません。

これはマツチの薬品と玉葱との科學的作用と云ふやうなことではないので、唯マツチをくはへて少しでも口を開けてゐると自然呼吸が鼻から口へうつて來るので、玉葱から出る刺激物(硫化アルコール)を顔のあたりにフワ／＼させておかないで、口へ吸込み また出す息でおさへつけて吹きとばすと云ふ結果になるのです。だから、マツチの軸に限らず手近かなもの何んでもよい譯なのです。

金魚しらみ

金魚をお買ひ求めの際は金魚しらみ(専門語ではてふ)の卵がこりついてゐないのを選ぶことです。この卵がヒリ付いてゐると榮養を殆んど吸ひ取つてしまひますから。これは白い卵ですから肉眼でも判り、ピンセットでも直ぐ取れます。

大歌壇

與謝野晶子選

○ 土佐 山元 南湖

花ちるを見れば心のうごくなり

ゆゆしきことに出逢へることく

○ 大阪 小山 文二

めぐり來し春に逢へども物の芽

の端に及ばず空しき己れ

○ 小倉市 益田 慧光

地球をば踏む形見せ喜びぬ始め

て立てるわれの幼な兒

○ 山口 竹原 恵明

み佛にたてまつらましわが庭に

光りのごとく杏花さく

○ 香川 横江 史枝

雨もよし風さへ樂し此の頃の心

み法を深くたのめば

○ 東京 町田 淳雄

都にて物を學べどふるさとを常

に思ひぬ堪へがたきまで

○ 東京 土岐 學信

怠らずよく學べよと師の僧は我

れを都に出だし給ひき

○ 静岡 一向 山人

遙かなる友の歌かとうなづきて

繰返しよむ手の上の本

○ 滋賀 近江小夜子

なつかしき母のごとくに春の野

は乳の香ぞする出でて遊ぼん

○ 和歌山 畑中 麗月

花匂ふ野崎の原に法悦の霞たな

びく開山の御忌

○ 埼玉 青野 智恵

もろもろの雑念を捨て手に取り

し珠數の手ざはりなつかしき哉

○ 長野 田中 廣司

おふけなくいとまかしこし大君

の都に事を兵の擧ぐ

○ 滋賀 高田 清

兄上の七週の忌を行へる悲しき

庭に櫻花咲く

○ 東京 三野輪香雪

石老の山うち燃りおん寺の椿濡
れたる甲斐の春雨

○ 延岡 黒石 友哲

亡き父の爲に申さんわが爲に添

へて申さん南無阿彌陀佛

○ 滋賀 佐々木孝純

農人となりて大地を拓かまし若

草の香を愛でも嗅ぎつつ

○ 和歌山 奥村 映水

わが庭に雀の親子物食めば母な

きわれの嘆かるるかな

○ 廣島 上原 抱地

訪ふ人もなき避難舎にはのぼの

とさくら咲くなり曇日のもと

○ 京都 福島孝治郎

亡き父を夢に見まつり戀しけれ

在しつる日の偲ばれぞする

○ 三重 香住 紫精

いとけなき我が幼兒を慈しむ母

の姿ぞ佛なりける

○ 神戸 秋田 里次

さくら花散りしく方にたたずめ

るみ寺の僧の墨染ころも

○ 大和 高市 丈晴
三月の雛の殿に据ゑなまし美し
きかな今宵嫁ぐ子

○ 岩手 藤原貞二郎

山櫻いまさかりなりかの丘の松

の間に雲をひきつつ

○ 神奈川 眞島 梅作

寂しくも病む身に沁みぬゆふぐ

れの浦回にひびく漁船の汽笛

○ 滋賀 本間 秀道

はるかなる旅路なるかなあこが

るる國へつづけどわが歩む道

○ 姫路 内海 眞瑞

空晴れて五彩ののぼり揚るなり

若葉のまろく重なれる上

○ 廣島 川田 信嶺

雲雀啼く草徑のはて古き城霞み

て旅の思ひはるけし

○ 北海道 花田 順往

今にして學びの道にはげますば

後に悔ある身ともならまし

ともすればあらぬ方にも迷ふべ

し學びの道に心ゆるすな(某學生)

信念の
生活

夫に盡す二十年の苦節

新婦女鑑 松永キク女

永井鳳泉

結婚後、僅か二十日で！

『たゞいま、けふはお加減はどうでした？』
日暮れになつて疲れきつた身體を野良から引摺るやうにしながら戻つて來たキク女はそれでも我家に一步足を踏み入れ、病ひの床に臥つたきりの夫の顔を見ると、いつものやうにやさしい微笑の色を面に漂はせて言葉をかけるのでした。

北九州、佐賀縣の伊萬里驛から數町の南、松浦富士で有名な腰岳の麓にある渚と呼ばれ

る村落の中のさゝやかな一軒家。その主人松永幸吉氏方にキク女が嫁いで來たのは明治四十四年、彼女が二十のときでした。ところが何といふ運命の試練でせう！彼女が婚禮の式を挙げた日から僅かに二十日のこと、新婚の夢もまだ醒めきらぬうちに、夫の幸吉氏は腰部に出來た悪性の腫物のために、町の病院に入院せねばなりませんでした。そこで直ちに治療手術を受け、引續き四ヶ月も入院してゐましたが、一向に傷口が恢復しませんので、病院をかへ一更に七ヶ月も臥たきりとい

ふ有様でした。その間、家に一錢の蓄へもないキク女は、野良仕事を始め家事上の一切を女手ひとつで引受けて、晝は爪から火の出るほど働き、さうして儲けた僅かの金を病院に持つて行つては、夜の目も碌に眠らぬ看病。彼女のこの熱心さには、さしもの難病も少しづつ癒つて來て、喜ばしい退院の日を迎へることが出來ました。

『おキク、えらいお前一人に心配かけたなあ、お蔭で俺もやつと元氣になつたから、これからは俺が働くぞ！』

それから幾日かは、野良に出て楽しく働くキク女夫婦の睦じい姿が見かけられました。

が、退院後、まだ間もないときです。夫幸吉氏は下關重砲兵隊に、勤務演習のために召集されることになりました。その召集中の出來事ですが、一日營庭で開かれた銃劍術競技



(松永キク女)

會に出場した幸吉氏は、一寸したはづみにまだ十分癒り切らなかつた患部を強か突かれてその場に昏倒して了ひました。人事不省に陥つた幸吉氏は、衛戍病院に十餘日の治療を受けてから、すっかり衰弱しきつた體で、郷里に昇ぎ込まれて來ました。早速キク女は、醫者よ藥よと看護の限りをつくしましたが、あゝ夫幸吉の雄々しい健康體は、それきり再び見ることが出來なくなつて了ひました。爾來二十年の長い歲月、身動きさへならぬ夫をいたはつて、一家を支へるキク女の奮闘がつづけられました。

あゝ、この貞節！

一日働かねば一日食ふことの出來ない貧しい小作生活。そこへもつて來て夫の重病！一日とても缺かせられない藥代！夫婦の間に生まれた一子力藏は幼な過ぎて足手まとひになるばかり。手も足も出ない中から、一家の暮しを背負つて立たねばならぬキク女！

普通、農家にあつては稲田四段を作ることが男子の一人役とされてゐます。それをキク女は、女の手ひとつで八段の稲田と三段の畑とを耕作するのでしたから、並大抵の勞働では到底出來ないことでした。で、キク女はどんな寒い朝でも一番鶏の鳴く三時には必ず寢床から起き、野良に出る前に草履を作り縄を糾ひ、病人の朝の纏帶の取換から、食事の支度！それこそ腰を伸ばす寸暇もなく、終日働きてつづけました。夕方暗くなりかけて我家に戻る頃には、もう人心地もせぬくらゐに疲れしてしまひます。

或夜は、明日町へ野菜賣に出かける準備の

ために十二時過ぎまで働き、夏の陽光に水も煮えかへる土用の日中には、午睡に耽る村人をよそに、赤坊を背負つて、ひとり田の草取り！でも、親子三人がせめて粥でも喰ふには心を鬼のやうに強くして働かねばなりませんでした。

キク女がさうして働いても、人手と肥料の足らぬ彼女の作物は、いつも出來榮えが思はしくなかつたのは、當然すぎるほど當然なことであります。それ故、小作米を拂へば手許に残る米はほんの僅かばかりでした。その米さへ、前から秋の取り入れを當てに借りてゐた藥代に代へられてしまふと云ふ悲惨な有様が續きました。稲刈りの済んだ翌日から、またもや一升買ひ、五合買ひの苦しいその日暮しが始まるのでした。しかし、キク女は落膽しませんでした。病人と子供とは出來るだけ食べ物を注意してやるかはりに、彼女自身は、常に驚くべき粗衣粗食！

『おいしいとかおいしくないとかは、生活に餘裕のあるものの贅澤！腹さへふくれれば生

きてゆけるのだ！」

さう強く信じて、いつも彼女は南京米のお粥をすゝつて暮して来たのでした。

昭和の初花！

それは或年のお彼岸のときでした。病床の幸吉は、徒然なまゝに、

『なあおキク、上方からおえらい坊さまで町へお見えになつたさうだな』

『さうですつてね』何氣なくキク女が相手になつてゐると、

『俺もこんな體では、いつ佛さまになるか知れないのだから、さう云ふお坊さまの右難いお説教を聴きたいと思ふがな』

いかにも心細さうな夫の言葉に、彼女はハツと思はず胸を打たれました。

『わたし、ほんとに氣が利かないですみませんでした。では、あすの朝早くお連れしてあげます』

そこで彼女は翌朝、近所から荷車を借りて来て、その上に蒲團を敷き、病夫を乗せて、

説教所のある町まで曳いてゆきました。

『あゝ、あれが渚のおキクさんか。ほんとに



感心な嫁さんぢやこと』

『いざり勝五郎車に乗せて、曳くや初花箱根山つてところだ』

参詣に行きずりの人達は、いづれもキク女の貞節に感心させられてしまひました。

……町の人達は、その後とてもキク女が病夫を乗せた荷車を曳いて、伊萬里名物のお供日祭や、そこ此處のお寺詣りに出かける姿をよく見かけては、蔭ながら涙を絞らさせられました。

大きな教訓

昭和五年の秋、夫幸吉氏はキク女の手厚い看護のもとに永眠しました。

『おキク、本當に俺程果報者はなかつたぞ。この世では、お前に世話になり通しだつたが、あの世では屹度恩返しをするぞ』

死に面して夫は繰返しキク女に感謝しつつ、安らかに息を引き取つたのでした。

夫をもういちど健康の日の夫に戻したい、キク女の切なる願ひはきゝとゞけられなかつたけれど、彼女の日本女子の鑑としての貞節

は、遂に明るい世間に持來されるときが來たのでした。昭和六年の三月、佐賀縣立伊萬里女學校では、地久節の佳節をトして、キク女の頌徳式を舉行しました。つづいて彼女の名は北九州の隅々にまでひろがつて、その婦女鑑の生きた模範を口々にうたはれるやうになりました。

『百千の學者の教へよりも、この松永キク女一人の生きた行爲の方が我等にとつてこの上もない教訓である、力である！』

しかも、そのキク女はいまも夫の在世中とかはりなく、一子力藏の成長をよろこんで、我家二人のいそしみで、相かはらずのつつまやかな生活をしてゐます。

『……辛抱せよ！ 決して絶望するな。一旦嫁入つた以上は夫の家が死場所である。どんな辛いことがあつても實家に戻るやうなことではならぬ。』

我國古來の婦道の美德は、松永キク女の輝かしい存在によつて、こゝに新しく見かへしされることになつたのであります。

諸國のろばさ

王冠の修繕

英國皇帝陛下の王冠が目下寶石商の手で修繕されてゐる。英國では皇帝が位におつきになる度に幾何かづゝの手入れをするこゝとが必要なのだそうである。ジョージ皇帝陛下の御頭の御型は父君のより稍小さめにあらせられたが、エドワード八世の御頭はジョージ陛下のより稍長めにあらせられると。

戴冠式にのぞむ以前に王冠を御頭におのせし申て型を合せると云ふ譯に行かぬので、御下命を受けた寶石商では陛下の御帽子の型を基にして目下修繕を急ぎつゝある。それによると寶石を若干置き代へなければならぬそうである。仕事の終り次第王冠はロンドン塔に送り返されて來年の戴冠式までそこに奉安される筈であると。

伸びも伸びたり

セイロン島、カンデイのパラデニヤ園の竹簾の竹はいづれも百廿尺以上ある。

人間嫌ひ

米國はニュージャシー、ジョン、ストラング君の家には、入口の階段もなければ、戸口の取手もない。爪でも立てなければ開かないと云ふ仕掛だ。彼氏曰く『どうしても俺に逢いたいと云ふ仁は裏口から廻つてくれ。』

長命のラケット

ホノル、の庭球選手ビアトリス、ラム、フオイ嬢の使つてゐるラケットは八十一年間使はれて來たものだが、彼女はそれを使用して今から四年前に二つの試合に優勝した。そのラケットは一邊もプレスされたこともなく、綱を張り代へたのはたつた一度きりだと云ふから驚く。

釋新抄語法人上然法

草ひふあ

康辨村中

師はまた語り出した。

「我國は宗教のデパートだと云はれる位、極めて低いものや、また極めて高いものが雜然として行はれて居りますから、仰しやる通り、一寸判斷に迷ひますが、一般に高等のものは理解され難く、程度の低いものが受け入れられます爲に、宗教に餘り關心を持たない人達まで、宗教は神秘的分子を持つものだと思つて居るやうです。然かも神秘と云ふものには一種の魅力があつて、自分に弱點があると、兎もすればそれに引きづられ勝です。

人間の弱さ！

其處に類似宗教や迷信が繁昌し得る素地が有る譯でせう。

ですが神秘主義の宗教は大概病氣が癒るとかお金が儲かるとか云ふ事が中心になつて、それを理論付ける爲に、倫理道德や甚だしいものになると佛教哲理などを巧みに鹽梅して、恰かも高等な宗教らしく見せかけて居るのは、誠に近代色があつて、非常に面白い現象だと存じます。然しそれは自分と信者とを擁護する爲の煙幕に過ぎないので、玉ねぎの皮をむいて行くと何にも残らないやうに、それらの宗教も結局は物質主義の臭氣を發散させてゐる丈で、中味は何もないやうです。

「正法に不思議なし」

と云ふ言葉があります。正しいものには特異な神秘的な要素を含んで居ないと云ふ事です。そして正法とは佛教の事を云つたのですから、一面に於て此言葉は、世間の迷信邪教に對する爆彈的宣言でもあつた譯です。



大體に於て宗教が奇蹟や不思議を押賣して居るなら、それは多分にインチキを含んで居ると見てよいと思ひます。宗教の根柢には人間及び社會をして大宇宙の進展に素直に従つて、共に其綜合的大旋動に寄與せんとする念力が流れて居なければなりません。随つて人間生活をより正しくし、社會國家をより正しく發展せしめなくてはならぬのに、そして現代は餘りに個人主義物質主義に偏重して其結果幾多の行詰りを生じ、之を何とかして打開しなければならぬ一大變局に直面してゐるのに、敢て更に物質主義個人主義な奇蹟や不思議を當にするやうな宗教を宣傳する事は、寧ろ天地の大道に逆違するもので、邪教たる事は申す玉ねきの皮をむいて行くと何にも變らぬ

までもないと存じます。其上に奇蹟や不思議を押賣する宗教に限つて依古最良が多いやうであります。

つまり神へのおべつかが要求されて居ます。自分を改造することは、そつちのけで、唯だ、神への媚が珍重されて居ます。随つて献金の多少に依て奇蹟が加減される。即ち其個人の幸福は神の依古最良に依て規定されて居ります。こんなのが正しい宗教なのでせうか。申す迄もない事です。

宗教批判の原則として私はこんな考へて居ります。即ち、

其宗教を信奉して居る人が常に清く貴く生きる事を念願して居るか何うかと云ふ事。

そして其宗教に依て凡ての人々の品位が高まり社會國家が健全になつて行けるか何うかと云ふ事。

この二つが最も大きな正邪の分れ目だと思ひます。

仰しやる通り自家宣傳は嫌やな氣持を起させます。然し乍ら宗教は教化とか布教とか云ふものを使命とするもので自分の信するものを世の中に紹介し、一人でも多く正しい人間生活をなすやうに望むのは當然のことで、それを身體でやるか言葉でやるか仕事でやるかの區別はありません。宗教を信する者は必ず何かの方法を-throughして、自分の信じて居るものを宣傳するものです。

唯だそれを見それを聞く人の方で、高い批判標準を以て、それを批判し、共鳴すべきを共鳴し排除すべきは排除して行けばよいではありませんか。要は見る人聞く人に熱心な求道心があるかないかによるものだと思ひます。

若し私達に強い求道心がありますれば、よし誤つても一時は類似宗教のやうな低い信仰に入りましても、其人の本心に満足する事が出来なくなつて、段々正しいものを求め、本當の水源を探ぐり當てやうと努力するに至りませう。

此意味から云へば、色々な宗教が起つて社會の人々の宗教に對する批判の眼が高くなる事は、正しい宗教に取つて逆縁的効果がないとも云へません。

問題は求道心の強さにあります。

法然上人は

「まさにいま多生嚟劫をへて、生れ難き人界に生れて、無量劫を送りて、あひ難き佛教に逢へり。釋尊の在世にあはざる事はかなしみなりと雖も、教法流布の世にあふ事を得たるは是れよろこびなり。たとへば目しむる龍の浮木の穴に遇へるが如し。」(藤井氏)

編法語抄三

「すみやかに出要を求めて空しく歸ることなかれ」(同 七)

「佛道修行はよくよく身をはかり時をはかるべきなり」(同 九)

と云つて居られますが、私達人間と云ふものは、ホンの僅な時間丈しか持つて居りませんし、一度死ねば再び生れて來られるか何うかも判らないのでありますから、此生で居る内に、人生の問題を解決して、自分の中に永遠の價値をシツカリ見極めて置かねばなるまいと思ひます。

縁と云ふふものは妙なもので、何處に何んな直接的な宗教機縁が隠されて居るか、自分自身には判らないものです。

私達に正しいものを求むる心さへ強ければ、何んな表裏の瓢箪から駒が飛び出さないにも限りません。宗教の御話を聞いて居て、初めは上の空で判つたやうな判らぬやうなと云ふ有様であつたが、唯だ一言自分の本心の琴線に觸れて、グツと心の奥底にこたへるところがあると、それからグングン宗教的な眼が開き初めて、高い立派な信仰深い人になると云ふことは澤山ある事です。身と時とがピッタリ一致する時、其處に火花が發して、今までは理解丈であつたのが情熱的な信仰と變じ、其人の一生を支配することにもなるものです。

丁度、卵が温められて時節到來すると、自然に雛子が飛び出すやうに、「身をはかる」と云ふ自己反省と、「時をはか

る」と云ふ高い批判力とが一つになつて、今までの自我思想から来る迷信的なものを一切かなぐり捨て、力強く天地の大道に一致しやうとする一大決心が油然而して生れて來ます。

法然上人の御言葉の中にこんなの

があります。

「人の手より物を得んずるに、すでに得たらんと、いまだ得ざると、何れか勝るべき、源空はすでに得たる心地にて念佛は申すなり」(藤井氏編法語抄五六)

本當に信仰の事實はさうでなくてはならぬと思ひます。

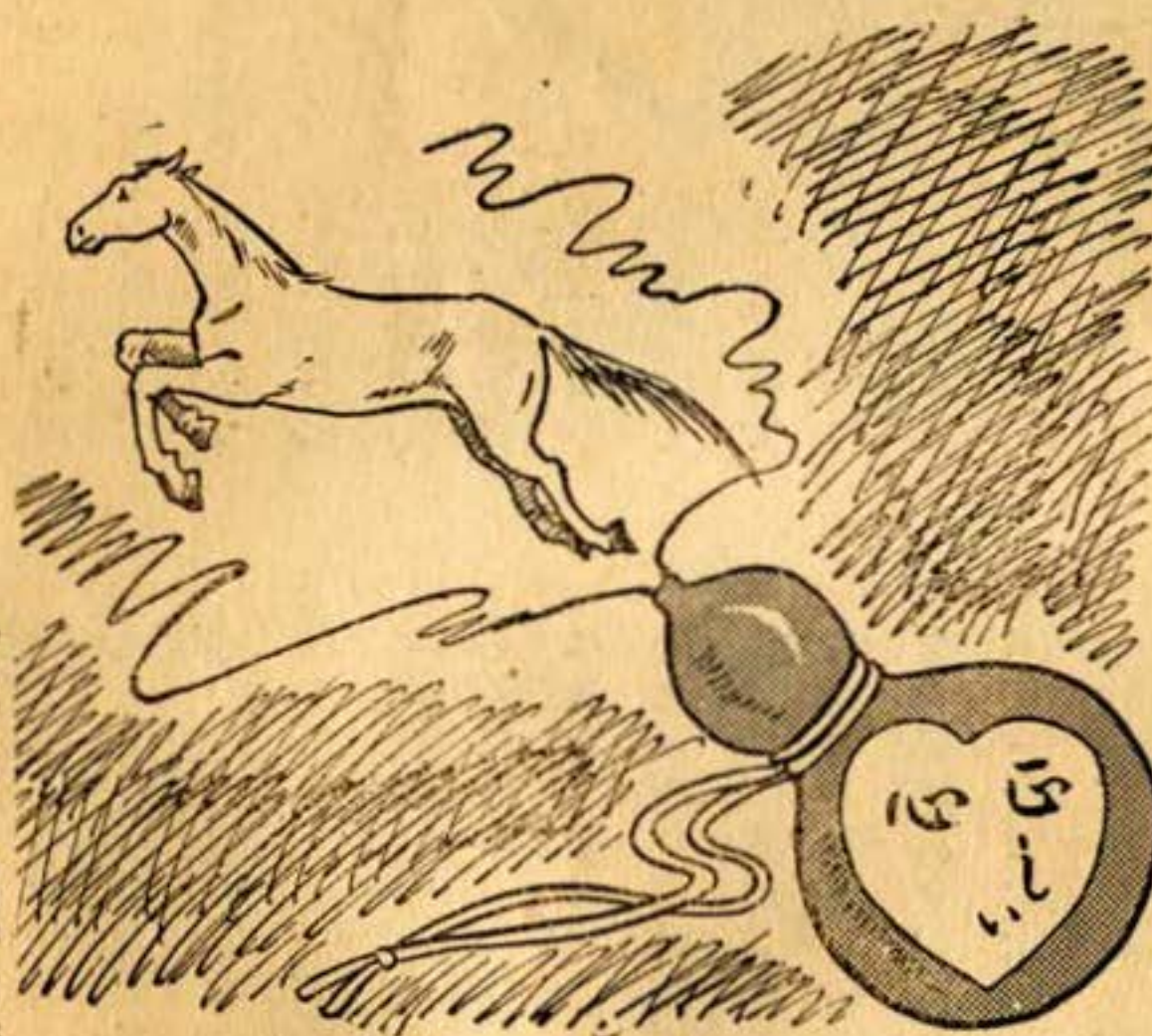
「既に得たる心地」こそ信仰の充實性です。

そんなものは其人の主観丈ではな
いかと、簡単に片付けて仕まふ人も
ありませうが、私はさうでないと思ひます。

信仰は決して主観丈で終るものではありません。其處には何時も宗教的感情が動いて居ります。随つて、それは其

人の生活の上にも現はれ、其人の性向をも變へずには居りません。

正しい心が強ければ飄飄から駒が飛びださぬとも限らぬ
たとへそれが迷信であつても、其人の一生を支配する程の力を持つのが信仰ですから、決して主観だけで終るものではありません。況して理智と情意との併行され行く正信は、其人の人生觀を變へるばかりでなく、生活態度をも根本的に更へて仕まふ筈で、單なる迷信よりも理智的要素をもつだけ、それだけ根強いものがあります。



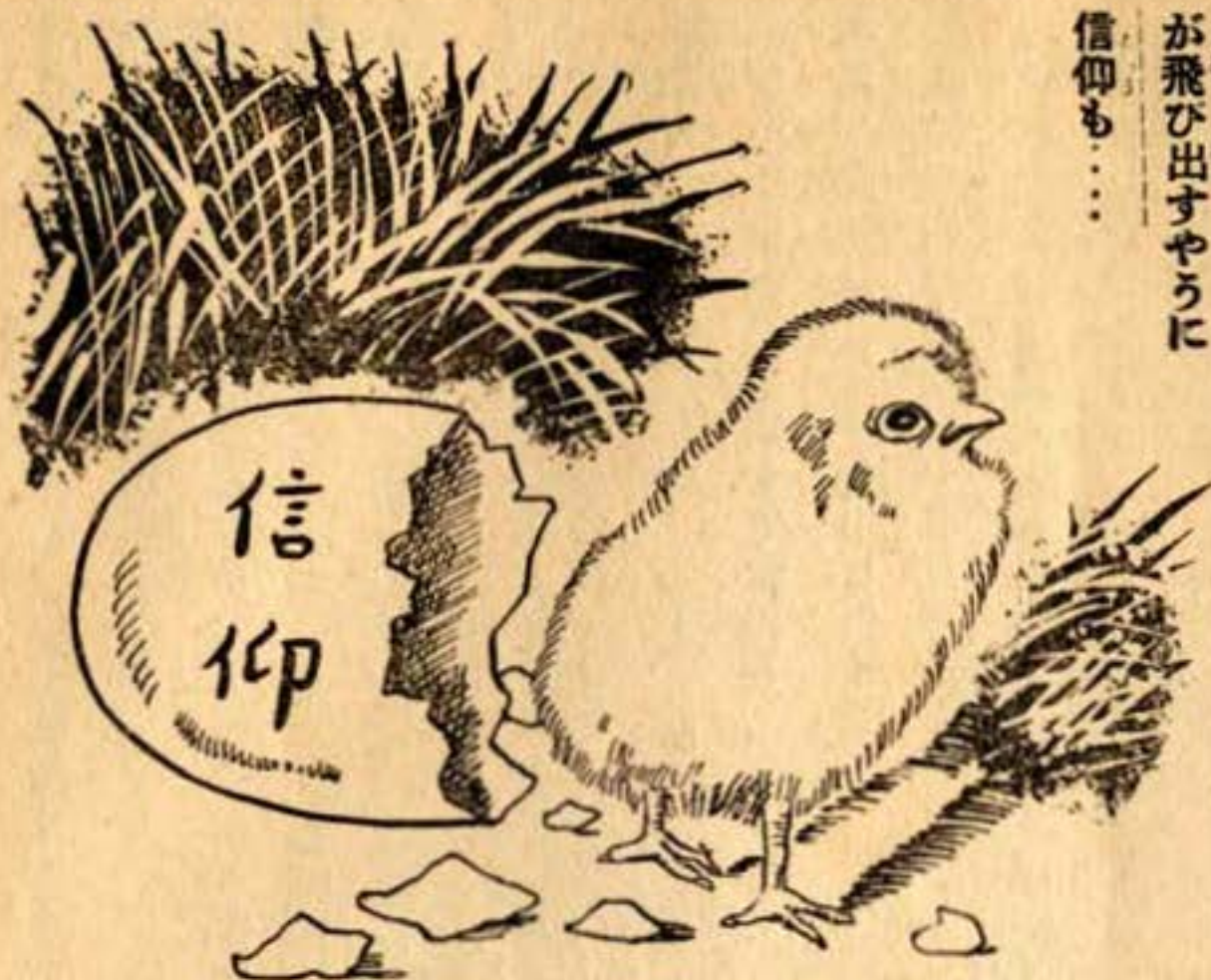
だからあなたのやうに頭から毛嫌ひせず「既に得たる心地」と云ふ確信を得るまで、求めに求め抜いて行くのが本當ではないでせうか。

無論夫々の教派宗派に於ては、互ひに蘭菊美を争つて「我こそは」と宣傳に努めますが、之は全く止むを得ない事でせう。自ら信ずるものは、兎にも角にも其人に取つては

最上最善のものなのですからね。然し夫れが爲に他を批難したり悪口を云つたりして、自らを反省しないのは何うかと思ひます。破邪と顯正とは元來二にして一なのですから、積極的顯正は直に消極的破邪となつて行くのが正道だと存じます。随つて積極的な破邪は謂ゆる權道であつて、

丁度卵が温められて時節到來すると、自然に雛子が飛び出すやうに

信仰も……



てはならな
いのですか
ら、勢ひ自
家宣傳の顯
正的態度を
取る譯で
す。それを
一一癩にさ
はらせて毛
嫌ひして居
るのでは、
眞に道を求
める人の態
度とは云へ

ません。そこはよく理解してやつて、こちらは高い批判の眼を以て正しいものを選んで行けばよいではありませんか。

法然上人は、

「自他宗の學者、宗々所立の義を各別に心得ずして、自宗の義に違するを、これ皆ひがごとと心えたるは、いはれなきことなり。宗々みなおのおの立つるところの法門、各別なる上は、諸宗の法門一同なるべからず。みな自宗の義に違すべき條は勿論なり」(藤井氏編法語抄一二三二)「凡そ一宗の習ひ一代聖教におきて淺深を判する、つねのことなり。然れば一切經は釋迦一佛の所説なれども、宗々の所學にしたがひて、淺深勝劣不同なれば、いづれの宗の一切經といふべし。天台宗の一切經あり、華嚴宗の一切經あり、乃至法相三論にも、おのおの一切經あるべし」(同二三四)

と云つて居られますが、かうした態度は全く公正で、宗教其ものの立場を理解し同情して居る者でなくては云へない言葉だと存じます。

法然上人は公正なる批判を尊重せられ、純粹なるものへの選擇を重ねられて、遂に求道生活三十幾年、四十三と云

ふ歳に始めて「凡てのものは救はれる」と云ふ淨土宗を開顯せられたのでした。

我國の宗教史を大觀する時、一寸面白いと思ふことは、聖德太子以來、佛教が國教的立場に置かれ、律宗のやうな實踐を主とするものもありましたとは云へ、大體に理論的現實的佛教で、ことに平安朝に入つてからは天台眞言の二宗が樹立されて、觀法と云ふ實踐的なものも多少行はれましてたけれども、少くとも法然上人が出られる前までは、何れも現實主義で、理論的に永遠の生命への確信と云ふ佛教本來の理想が論議されましたものの、それは専門家だけで、最も佛教と交渉の深かつた民衆の一部上層即ち貴族は、全然享樂中心の生活しか知らず、如何に永く現實的享樂を持続し得るかと云ふことのみに腐心して居たのですから、佛教もまたその影向に支配されて、御祈禱中心とならざるを得なかつた有様でした。人間生活としての規範を授受すべき「授戒」と云ふ事でさへ、病氣に對しての効驗の有無が中心問題だつたのですから、他は推して知るべしであります。

ところが法然上人の出られる前頃から、末法思想と云ふものが盛んになつて、心ある者は隱遁者となり、甚だしき

は、現實否定の自殺者さへ續出せしめた位でしたが、それは、貴族上層階級の廢頹思想への抗爭だつたとも云へませうが、全く一般民衆は實に悲惨な状態であつた事を物語るものでもあります。其處へ法然上人が、現在より未來への希望と、未來から現實への回光返照との二つの重大問題に對する解決をして呉れたので、人々は、魂の安心と業務に就ての安心とを得たのでした。

然し鎌倉に於ける政權が安定せず、猜疑と偏狹とクーデターとが行はれ初めたので、再び人心が動搖し、宗教も現實的色彩を帯びて逆轉の傾向を示して參りました。かくて武家政權が續き、明治維新となり、物質文明が潮の如き勢で押し寄せて、今日の如き現實享樂主義が横行するやうになり、雨後の筍のやうに物質的な類似宗教が續出すると云ふ大逆轉をしたのですから、隨分面白いものではありませんか。

此状態が何處まで續くものでせうか、私には判りませんが、此極まるところ、再び法然上人の如き偉大なる大宗教家が現はれなくては治まりが付かないのではないかと云ふ氣も致します。

然し私は思ひます。現代は人々の智力が段々平均して來

ましたから、一人の英雄偉人を待望することは、寧ろ不可能な事で、どうしても大勢の力、大衆の覺醒に依て正しき状態に立戻らなくてはなりません。大衆の精神的覺醒を待つ

てのみ、昭和の維新も完成せ

大衆の覺醒によつて正しき状態に立戻らなくてはならぬ。

こんな話があります。或る處に一人の跛者の子供がありました。友達が、「ちんばよ、びつこよ」

られる筈であり、宗教的には法然上人のやうな偉大なる人格を私達の心の中に再現せしむる事に依てのみ、本當の正しい人間生活が營まれて、現實のあらゆる行詰りが打開せられるのではないかと。現代は一人の偉人を待つ時代ではありません。各人の正しき理解正しき反省正しき覺醒が要求せられる時だと思ひます。



と虐めるので、或時隣のおばさんに尋ねて見たところ、おばさんは、「決してちんばでもびつこでもない。唯だ御前さんの左足が右足よりも少し短いだけだ」と教へて呉れました。然し何うも合點が行きませんので、再び向ひのおちさんに聞いて見ました。おちさんは、「イヤ、右足が少し延びて居るだけで、決してちんばでは

然るに一般は何うです。人生に對する正しい批判がないではありませんか。物質主義に依て生じた行詰りから逃避する爲に物質主義の宗教へ走つて居る現状は、たしかに正しい眼を失つて居る證據です。

ない」と慰めて呉れました相です。それでも腑に落ちないものですから、今度は村で一番物知りだと云はれて居る御寺の和尚さんに尋ねますと、

「右足が延びて居るのでもなく、左足が短いのでもなく、本當は兩足が揃つて居ないだけだ」

と云つたと云ふ一小笑話ですが、本當の正しい批判力を持たない私達は、事實、精神的な不具者であり、片跛者であります。

此跛者を癒すのが、正しい宗教であり正しい信仰でなくてはなりません。

即ち法然上人の云はれた「佛道修行はよくよく身をはかり時をはかるべきなり」と云ふ反省と批判との重要さが痛感されるではありませんか。

師の話しは綿々として盡きさうにも見えない。

私は唯だ黙々として聞くだけである。

そして何と云ふことなしに動かされ行くものを感じて溜息をついたのであつた。

日はまだ高い。

今までの御話しは、要するに外廓的な事である。

是からが段々内面的に進むのであらう。

かう思つた私は更に耳を傾けたのである。

(つづく)

家庭の寶

南

にをするにも手足を思へ

親が育てゝくれたるを

無

りか道理か見分けて貰へ

神も佛もお目がある

阿

さねするなよもつたいないぞ

あけてくださる朝日さま

彌

もちだいちに大酒呑な

酒がさせるぞ打ちたゝき

陀

いち忘れておとがめ受て

貧の種まく勝負ごと

佛

つにならねば親にも子にも

これが此世のいとまごい

編輯後記

◆ 今月から「こども欄」と「家庭欄」を設けました。童話はその方面

の第一人者福田正夫先生に御願ひしました。挿繪、連續まんがも野田信先生の靈筆をわずらはして立派なものが出来ました。まだく注文は澤山あらうと思ひます。諸賢の御叱正によつて、益々よいものにして行き度いと思ひます。

◆ 家庭欄の田中法善氏は宗教人であると共に斯道の大家、號を追つて獨特の家庭欄を作つて行き度いと思つてゐます。

◆ 前號子母澤寛先生の跡をうけた十一谷義三郎氏は既に諸君とはおなじみの深い作家、作者も編輯者も自信を以つて提供し得る近來の快作であります。

◆ 本號の特輯には現淨土宗の高僧を拉し來つて、各々感銘深かりし人々に就いて語つて頂きました。生活上、信仰上に大いなる指針となることを疑ひません。

◆ 大村桂巖氏の『青年徳田利恭の大往生』物語は生きた事實の描寫であり、氏自らが指導された青年の行狀であるだけに、その一言一句のもつ迫真力は、讀む人をして感銘させずに措かない。氏は淨土宗所屬の熱心なる念佛行者であり陸軍教官、大正大學教授、日本佛教青年會理事長として知られ、且つ自ら『教育と宗教』なる月刊雜誌を刊行して居られ、宗教々育の提唱者としても有名である。大島徹水師は既に讀者諸氏とおなじみの方であるから、改めて述べるまでもない。窪川旭丈師は光明寺貫主にして當代の大徳。

◆ 「袋中上人」御執筆の筑土鈴寛氏は大正大學國文科の教授、新進の國文學者。本誌の求めに應じて所藏の豊富な資料で袋中上人の事跡を縦横に通達せられた。必讀を乞ふ。

◆ 梅原眞隆氏をまた煩はしたが、これは過日は小石川傳通會館で數百名の聴衆を感激せしめた名講演の速記である。烈々な法然上人思慕の念にかられながら述べられ行く氏のこの講演は我等の胸をヒシ／＼と打つものがある。

◆ 鑽仰會も第二年の春を迎へて、益々激潮たるものがある。北陸九州に揚る大法幢、續いて各地に陸續と飛躍の歩武を進めつゝある。それに比例して我等の「淨土」も一途向上の一路を辿つてゐる。會員諸氏と共にこの多幸を祈らう。

淨土 五月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十二年五月二十日印刷納本
昭和十二年六月一日發行

(定價金十錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園四丁目
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢

(送料一錢)

一ヶ年 金一圓

(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人鑽仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然鑽仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十四錢

これぞ光明！ 時代の悩みを一身に背負ひ、精
魂をつからしめて、求めに求めた巨人が求道生
活の跡！

現代日本人が擧つて求めてゐるものは現實の生活に確りと根を張つた正しい信仰である。それがこゝにある。宗教を特權から解放して正しく民衆の上に齎らした巨大無双なる聖、我々が祖師法然上人の辿り給ひし信仰の道程こそ、現代人の求めてやまぬ信仰と最も良く合致するものである。

この書には、上人が萬人と共に悩み求められた求道、信仰の御生活を軸とし、それを廻る時代の種々相を描いて、何人にも納得の行くやう新切丁寧に説かれてある。
讀んで得られよ！ 正しい信仰を！

目次

第一 求道生活——第一期求道生活——求道の動機、恩誓の彼方へ、菩提寺での生活、上洛の道すがら。第二期の求道生活——叡山の出家生活、功德院の學問生活。第三期の求道生活——讀書三昧の生活、叡空上人との接觸。第四期の求道生活——碩學歴訪の旅。第五期の求道生活——再び讀書生活へ。

第二 信仰生活——入信時代の新生活——強い自己反省、萬人を包む人間反省、開宗の根底。二開宗時代の生活——山を下つて京の町へ。三專修念佛の生活——信仰を萬人の胸へ、集つて来るあらゆる階級、偉大なる人格の力、大原勝林院の信仰問答、全佛教の再認識。四迫害受難の生活——三十年氣が付かなかつた恨み、具體化して來た迫害、弟子の罪を負ふて、逆縁を順縁と見る、死生を超へた信仰の力、配所から再び京へ、死後まで續けられた迫害、宗教の極致。法然上人年表

◇ 發行所 法然上人鑽仰會 ◇

大木五臟圓

るすくよつをだらか



春に鍛へて

夏に

備へよ！

大木五臟圓は病弱體を根本から
立直すべく三百年一日の如く開病
に賴し、東洋本然の漢法醫學を以
つて歴史を保持す。

大木五臟圓の成果は歴史と共に、
益々好評を博し、近代醫學に伍し
燦然として輝いてゐる。

五三二一五
圓圓圓圓圓
藥價



元賣發
町路淡阪大・田神京東
社會名合木大

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十一年五月廿日印刷納本 昭和十一年六月一日發行

淨

土

第二卷

第六號

定價金十錢(送料一錢)